
鉄狩り

Circlecafe

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鉄狩り

【Nコード】

N49260

【作者名】

Circlecafe

【あらすじ】

鉄と融合した兵士『鉄器』戦後”禁止物となった彼ら”を狩る通称”鉄狩り部隊”所属のレイリ・ミドラの物語。

プロローグ（前書き）

はじめまして。

こちらはプロローグになります。

次回より本編開始しますのでよろしく願います。
暴力的な描写も多いので苦手な方はご遠慮下さい。

プロローグ

むかしむかし

この国にはたくさんの神さまたちが

ちじょうでにんげんといっしょにくらしていました

にんげんの王さまと

神さまたちの王さまは

たいそうなかよしでへいわな世界でした

ある朝

わるいにんげんが

かくしてあった神さまの宝物をぬすんでしまつて

おこつた神さまとせんそうがはじまりました

レイアニア帝国と、その隣国スレイド。

両国の間の戦火は長らく消えることが無かった。

双方疲弊し、もはや只の消耗戦になっているのは互いの国民の目にも明らかだった。

考古学者。

そう呼べばいいのであろう。

ある遺跡の発掘を行っていた者により発見された”それ”

出土した、両手のひらに調度収まるくらいの金属製の球体。

衝撃を与えると、その球体の内部より触手を出し近隣のものに

”まるでその意思であるかのように”

接触を行う、謎の古代の遺産。

事故が原因で偶然判明した特性

『触れた鉄を変貌させる』

詳しい調査もままならぬまま、即時軍事利用の開始は、
”今の状況下におければ致し方の無いこと”
その大戦に接する者、皆が思っただろう。

発掘された古代の鉄球

鉄の変貌だけで無く、鉄を人体と融合させる事ができる。
その事実を導き出すのは意外と時間を必要としなかった。

戦況を大きく変えた存在”人体に鉄を組み入れし兵”

『鉄器』

彼らは、畏怖の念と共にそうよばれた。

鉄器の出現により、

その戦争はその後たった数年で終結する事になる。

両国間の数々の条約締結をもった上にて、ある種『休戦』に近い終戦。

その五年後・・・

第一章 レイアニア第十六機制隊レイリ・ミドラ三尉 part 1

「っ・・・政府軍のやつらこんなところまで攻めてきやがった...」

粗野な雰囲気の傷ついた男二人：疲労しきった風で林道を歩く。

「くそ、戦争中は俺達を使うだけ使いやがって...この体だって...」

そういった男の腕

” 甲冑のような武器のような金属が肉に食い込むように ” 繋がっている。

その鉄も ” 血が通うようになっていて ” といった風に、一部脈動している。

連れの男も、同じように組み込まれた鉄が服から露出した首筋に。

「はやくみんなに知らせないと...」

ガサッ・・・

「鉄狩りどもか!？」

茂みからの物音に男達は身構る。

物音の主、こんなところにいるはずの無いような 小さな少女

透明感のある今夜の空気

月明かりに消えそうな...長く繊細な髪、少し貧弱ささえ感じる細い手足。

「なんで...こんなところにガキ...?」

少女は微笑み、その愛らしい小さな口を開く
「きみたちは…つよい？」
紫色に月を反射する、その瞳。

1

戦闘。

厳めしい装備と軍服に身を固めた者たちが、鉄を体に組み入れた『鉄器』たちと交戦する。

個に対し複数で囲むように仕掛け、取り押さえる。

第十六機制隊

通称『鉄狩り部隊』

戦後ゲリラと化した”鉄器の元国兵”達を捕縛するための特殊隊
彼らは皆、専用の剣を手に、身動きの取れなくなった”鉄と融合した体”を粉碎する。

数で勝るその部隊は優勢に事を進める。

鉄ぶつかり合うその少し外れ。

他の兵よりも軽装な女性が剣を担ぎ立つ。

彼女の目前には、両大腿から下を切り落とされ、手を地面につきなんとか体を支える鉄器の男性。

「…その剣…あれに触れさせたな…？」

自分の足を奪った、血液を隙間に湛えるようにぬめる剣を気丈に見る。

部隊の兵達の剣と同様、鉄肌を血管が這っているようなその独特の表相の幅広な剣。

それは鉄器と呼ばれる彼らの体の様子に酷似している。

「かつての同胞を斬る気分はどうだ？」

地面を真っ赤に染め上げるほどの流血を土が吸う。

近くに転がる主を離れた二つの足

それを切り落とした剣を担いだ

金髪はまだ若い女性兵士

少し前まで少女だった面影すらかんじる

細くも鍛えられた体

名を、レイリ＝ミドラという。

現在三尉の階級を持つ彼女は、戦時中からレイアニア帝国の軍職に従事してきた。

「貴様ら固いからな。おまえらと同じ方法で作った専用の剣だ」

レイリは言い放つように答えると、軍靴で顔面を蹴飛ばす。

「がふっ!!」

蹴飛ばした流れそのまま、倒れた足の無い敵の腹を踏みつける。

「鉄と混ざつてると長持ちするものだな」

多量の出血

最早致死量ではあろう。

「いいか軍人……」

血泡で口元を汚したまま鉄器の男は、話す。

「俺たちの……血も……赤い」

鉄が歪に融合した手のひらに自身の血液を掬い、レイリに見せつける。

「ちっ、うるせえんだよクソゲリラが」

舌打ちと同時に、止めを刺すため剣が振り上げられる。

「レイリ！非常事態です！すぐに来てください！」

戦闘用ではない軍服の小柄な女性兵がレイリを駆け足で呼ぶ。

「すぐ行くセレス」

「俺たちはレイアニ……」

そう言っているとレイリは剣をふり、何かを言いかけた鉄器の頭を胴体から切り離す。

第一章 レイアニア第十六機制隊レイリ・ミドラ三尉 part 2

2

「レイリこっちです」

先程呼びに来た小柄な眼鏡をかけた”セレス”と呼ばれた女性がレイリを誘導してきた現場。

何かを囲うようにしていた数人の兵が、レイリ到着に気がつき、一同姿勢を正し敬礼する。

「レイリ…これ…私たちじゃないんです」

兵たちの先の現状。

「そうだな。どう見ても私たちの剣の破壊力じゃないな」

細切れになった人だったもの。

バラバラの死体といった生易しいレベルでは無い。

肉塊に食い込む鉄の組織で、かろうじて”もとは鉄器”だった事がわかるくらいに…

「我々が発見したときにはすでにこの状態で…」

一人の兵が、レイリに説明する。

その意味不明で凄惨な状況に震える手を後ろに隠し。

「私が隊長に報告しよう」

レイリはそのまま踵を返し、部隊のキャンプのあるほうへと足早に向かう。

3

中は他のテントよりも広い隊長室。

出身階級を示す紋旗が掲げられ、それをバックにこういった現場には不釣合いな調度品ともいえる椅子と机。

その装飾された椅子に腰掛ける、この部隊の隊長であるういかにも貴族な男の前にレイリは立ち、鞘に収めたままの剣を地面にくように体を軽く預け状況を説明していた。

「撤退しろだと…？」

レイリの進言に疑問を表す隊長。

「細切れ死体の事は一番最初に話しただろう？あれはヤバイ。手に負えるもんじゃない。」

バン

隊長がテーブルを強く叩く。

「そんな意味不明な死体ごときで撤退してたまるか！！

なんのために陛下が…我が部隊に鉄器専用剣を総員配備したのかわからんのか！！」

前のめりにレイリを一喝する。

「ちっ…」

聞く気の無い隊長に対し、不機嫌そうに舌打ちをする。

「私の部隊は、伝統ある第十六隊なのだぞ？陛下も期待されておる。だいたい貴様らは…」

「あの死体は異常だ！！兵達を思うなら撤退させる！！」
レイリも机に手をつき強く言い返す。

「戦争はもう終わったんだぞ死神レイリ」

少しの間を置き隊長はそう言いながら椅子に座りなおす。

「…っ」

レイリの目の色が変わる。

「知っているぞ、死神と貴様が影で呼ばれる理由…戦時中、未曾有

の壊滅をした266部隊…

おまえだけは生き残った

さしずめ今回も、その恐怖でも思い出したのだろう?」

強く咬んだ唇に血が滲む。

「敵はたかがゲリラだ、我等正規軍になにをできようか…」

「それ以上…その事を…」

小さな声

飲み込むような嗚咽のような

「ふん…確か、266部隊の隊規は…えっと

罪には罰を、悪には鉄をだったか???

いつまでも戦争気分いるんじゃないぞレイリ」

見下すように話し続ける隊長にレイリは限界を感じる。

「てめえ!!」

『敵襲—————!!』

テントの外から聞こえた号令。

即座に反応するレイリは剣を手に外に飛び出す。

外は先程とは一変していた。

燃え、崩れるテントに隊旗。

煙と煤が飛ぶ中、鉄を体に配した敵と兵達の交戦。

「こ…これは」

啞然とする、遅れ出てきた隊長の横で剣を抜く。

ゴッ!!

横からの襲撃を剣で受ける。

「あああああああああああああああああああああああ」

鉄の腕をぶつけてきた敵の異常に血走った目。

「...」

牽制しながら身体を少し離し、隙について離れる。

「おい！レイリ状況を説明しろ！！」

「うるせえ！！！！まだ戦争はいろいろ終わってねえんだクソ隊長さ……っ！！」

鉄器は間合いを詰めレイリに再撃する。

[illegible]

狂ったように、当たる先が剣であろうとも構わず拳を打ってくる。

その鉄と混ざり合った手の組織が破れているにもかかわらず、一心不乱に打ち続ける。

「レイリ！何か様子がおかしいです！」

短銃で応戦しながらセレスが走りよる。

「わかってる！きやがった！！」

力一杯振り抜き

打ち続ける拳ごと胸まで決る強い一撃。

倒れる敵を横目に、息を整える。

「はあひとりまけちゃったあ……もつとがんばらないと」

月明かりに反射する紫の瞳。

年端も行かぬ小さな少女が隊長用テントの上に嬉しそうに。

レイリと少女の目が合う。

「うふふ…そんなけんもっててもぼくこわくないよ?」

そう言つとテントの後ろの闇に跳ねるよつに少女は消える。

レイリだけがその存在に気づいていた。

他の兵達は急襲に対し、切り返すことだけで精一杯。

レイリもすぐにまた戦闘に戻る。

「レイリ三尉！敵が多すぎます！！それに…何か様子が…！！」
一兵が叫びにも近い声をあげる。

何かの恐怖に追われるように攻めてくる鉄器達。

陣形もとれぬまま、方角すらも見失い、

間に合わず倒れていく兵達。

「どいてろ！！」

レイリが苦戦する少年兵を茂みに突き飛ばすように離しそのまま鉄器の腹に剣を突き立てる。

隊長のテントを含む本陣が音を立てて火をあげる。

「セレス！無事か！」

「はいっ！」

交わす声もすぐに飲み込まれる。

第一章 レイアニア第十六機制隊レイリ・ミドラ三尉 part 3

4

一夜にして壊滅したキャンプに残る、生き残った兵者は篝火を囲むように座る。

「なんだ！なんだ！！なんだ！！なんだあれは！！！」

隊長一人が声を荒げそこらを歩き回る。

「何故こんな急襲がおきた！！！！説明しろ死神！！」

その混乱した怒りの矛先はレイリに向く。

「単身殲滅戦専用鉄器、通称”コアシリーズ”それが今回背景にいます。」

無言のレイリのかわりに答えるのはセレス。

「なんだそれは！！！！くそう！撤退だ！動けるやつら！！俺を！！護衛しろ！！！！」

レイリが急に立ち上がり、隊長の襟首を掴む。

「それでも指揮官が貴様」

負傷兵や動けぬ兵のほづが最早多い。

「ふん、266部隊の指揮官は…レイリ、おまえだったな確か…」
負けじと言う。

強く睨んだままのレイリ。

「レイリ！！」

少し離れた、いまだ燃えるテントの火影から少女が一人こちらへ歩いてくる。

「あのガキが…なんだというのだ！！！！」

隊長を投げ捨てるように放し、すぐさま剣を抜き少女のほづに駆け込むレイリ。

「あら、いきのこった？きみつよいのかな？」

「みんな！逃げて！！」

距離を詰めるレイリと同時にセレスが叫ぶ。

状況が良く飲み込めていない隊長のほうを一瞥し、

兵達の方を再度向く

「総員退避！動けるものは負傷兵を連れて！早く！これは命令です！！」

「ま…待て！貴様ら！！隊長でもないやつ命令など…」
ドガッ！！！！

兵達が戸惑う中、レイリが吹き飛ばされ戻る。

「ぐあー！」

少女がレイリの胸に、両の足を揃え飛び乗った。

「きみ、なかなかつよいへいたいさんだね？でもよいね」

そのまま何度も足を顔に叩きつける。

「えへへ、おかおぐちゃぐちゃ」

無邪気に砂場で遊ぶように踏み続けられるレイリの顔。

「レイリ三尉！！」

三人の兵がレイリを救わんと少女に攻撃にかかる。

「やめ…！」

セレスがそう叫び終わる間もなく

振るわれた小さな手

二人の兵の身体はバラバラに千切れ、

もう片方の手は簡単に剣を止める。

「あ…」

その手の中で飴のように曲げられる剣。

一人生き残った兵が握る、通常よりも屈強なはずの剣はいとも簡単に形を変えていく。

「ば…ばけもの…」

そう言うしかないだろう。

その一言が少女の表情を変えた。

ゴシユツ！

へし曲げた剣を、その剣の主にもそのまま叩きつける。

身体にめりこませ、吹き出す血を浴びながら少女がつぶやく。

「ぼくは…ばけものじゃない…」

その隙に体を逃がそうとするレイリ。

「ばけものじゃない…ばけものじゃない…」

ブツブツと言いながら余裕すらかんじる動作で、金の髪を掴みレイリの動きを封じる。

「がっ…」

そのまま持ち上げられ、レイリは顔面を地面に叩き込まれる。

「ばけものじゃない…ばけものじゃない…」

鈍い音が連続して鳴る。

レイリの頭を持ち上げ、地に叩き込む

また持ち上げて

叩き込む

そしてまた持ち上げて

叩き込む

「がっ…ぐ…ガフっ…」

レイリの反応は回を追うごとに小さくなっていく。

幾度もぶつけられた地面は軽くへこんでいくように見える。

兵たちはその絶望的な風景を背後にセレスの指示で皆逃げていく。負傷兵たちもなんとか、同僚の肩を借りたりなどして。

起き上がりこちらを睨みつける少女。
視線が合う。

5

「ぼくと…おんなじ？」

「ああ！！軍人は面倒くせえ！！」
上を向いて、そう大声を上げると少女のところまで踏み込み剣撃を
いれる

「きみも…」

それをまた片手で受け止める少女

「まあ、あんな化け物狩るのは、普通の兵には無理ですよね」
レイリの戦闘を見ながらセレスは、腰がぬけたままの隊長に言う。
「…わたしを助ける…」

セレスは隊長の正面にしゃがみこみ顔の高さを合わせる。

「駄目ですよ？わかりませんか？総員退避しないと、

レイリが特別製の鉄器だつてばれちゃうじゃないですか？」

ニツコリと笑顔で答える。

「言ってる事の意味がわからんぞ！！あいつらどう見たって人間じ
やないか！！なんであんなに…」

「レイリもあの子も通称コアシリーズと呼ばれています。

ようは、特別製なんです。戦闘力も。誰かいて本気出したらバレち
やうじゃないですか」

隊長は少し黙る。

考え込むと、急に大声で笑い出す。

「はは…なんだ…私が貴族階級だからか！！…知る資格は私にはあ
る…はは…陛下まったく人が悪い」

そんな隊長を笑顔のまま見るセレス。

ゴンー！

レイリと少女は、顔がもうひつつかんばかりの距離で牽制しあう。

「なんでぼくたちだけがしなきゃならないんだっ……！！」

「心配すんな。いずれ私も化け物らしく死んでやる。」

二人の距離が離れる。

「死んだやつらはかわいそうだったな、私みたいに高級な身分じゃないと確かにこの秘密は知れない！」

意気揚々と立ち上がり、レイリ達の戦闘を見ながらまるで演説のよう
に高揚して話す隊長。

「どうして……！きみもとくべつせいなのにあんなのぶきになりさ
がる……！」

少女の問いにレイリは剣を構えなおし

「あ……？知るかよ……！残念ながら今はそれが仕事なんだよ……！
また走りこむ。」

「罪には罰を」

セレスが見つめる。

そのレイリの姿を真剣な面持ちで。そしてそう呟いた。

戦闘はレイリのほうが押している。

「レイリ気に入ったぞ……！！おまえのその戦力……！！わたしの部下
にふさわしい！」

ははは……！！陛下はこの私に……！！秘密と力を託されたのか……！！命令だ
！さっさとその化け物を退治しろ……！！」

下卑た笑いが響く。

「ぼくはばけものじゃないのに！！！！！！」

「悪いな……！！」

蹴飛ばされ太い木幹に少女の身体は打ちつけられる。

「なんでだよ……なんでだよ……ぼくたちはとくべつ……」
よろめく少女。

レイリは少し俯き

両手で剣をまつすぐ静止させる

「特別もクソもない。おんなじ唯の、鉄クズさ」

剣は真つ直ぐに

少女の胸の中央を打ち抜く

背中から飛び出す

素早く引き抜く

垂れ下がる臓腑と同時に転がり出る
金属製の球体。

「あ……ぼく……」

小さな口から漏れた最後の一言は聞き取れなかった。

6

「これがおまえらの強さの秘密か」

隊長は”少女の体内に入っていた金属球”を手にとって眺める。

「レイリ、おつかれさまです。あの子、多分初期の実験体だと……」
セレスは息を切らすレイリを気遣い上着をかける。

「はは！これを腹に入れたらそんなに強くなるのか！！」

隊長は上機嫌だ。

「隊長、それはそもそも、それは軍部上層では”コア”と呼ばれ、触れさせるだけで鉄を強くするものです」

嬉しそくに球体を月明かりに照らし見る隊長に姿勢よくセレスが説明する。

「対鉄器用ソード、いえ、鉄器すらもそれを利用して作られています」

「何？そうか！！そして特別製は体内に…陛下！これぞ私に相応しい戦力！！力！！」

必ずやゲリラどもを根絶やしに…？」

言いかけた隊長は手の中の球体に衝撃をかんじる。

レイリの剣先がその玉を隊長の腹に深々と打ち込んでいる。

「は…な、なにを…」

「わりい、つきぬけちゃった。」

玉は後ろに転がる。

「あ、隊長さん。言い忘れましたが、ソレだけでは特別製にはなれないんですよ」

「んがあ」

一瞬、隊長の背面から転がった鉄の玉から”内部より伸びているような触手”のようなものが見えるが、すぐにただの”金属製の球体”に戻り静かになる。

「罪には罰を…悪には…」

「鉄だ。」

レイリはセレスが言い切る前にその発言を補足して、剣を引き抜く。隊長は一言も発せずただ口をパクパクとさせその場につつ伏せに倒れる。

「そうですね。生存兵撤退の後、隊長、奮闘にて殉職！

それでレイリ本気モード許可！つて建前で今回は報告しますね！」

「ちっ、ほんと、軍人はめんどくせえな」

レイリは立ち上がり、自分の肩にかけられた上着を脱ぐと、少し歩き

少女の死体に被せた。

「さて本当の戦争が終わるまでがんばりますか」

「ちっ」

セレスの一言に舌打ちし、その場を二人は後にする。

間章『尋問記録』

「鉄器クラス4一体、生存状況イエロー。今のところ全く情報は吐きません」

「もういい、下がらせる。私がやる」

第十六機制隊が壊滅する数日前。

部下を下がらせ捕縛した鉄器の尋問にあたるレイリ。

尋問用に設営されたテントの中は殺伐とし、机の中央に置かれた蜀台の光にも、一切安堵をかんじない。

拘束されている傷を負った男。

”鉄器クラス4”と呼ばれた存在。

”クラス”というのは、鉄器の強さを区別するため、戦時中につけられていた値だ。

例の金属球との接触時間が長いほど強いといわれていた時代は、戦争当時の事ではあるが、それすらもほんの、数年前。

腕以外は、少し鍛えられた普通の若い男。

腕、それが彼が鉄器である証明。

あきらかに人為的に組み込まれた金属類。

無骨に、食い込むように・・

どこからが鉄で、どこからが人間なのか。

男の腕を異形のものにしている金属たちは、
自分が生き物であることを主張するように息づく。

若き女性兵、レイリは無言でこちらを睨む傷ついた男に鋭く、静かな視線を向ける。

「人間に戻るか？」

レイリが問う。

「ふざけるな！俺たちはあ……」

拘束された男は、己を縛る鎖を、ひきちぎらんばかりにわめきだす。かなりたて、罵声と主張を浴びせられながら、レイリは淡々と、一方的に話を続ける。

「おまえは法律上今は兵器として扱われている。私に話を聞く理由は無い」

ビチッ……

レイリの顔に男の吐いた唾が飛ぶ。

レイリの目の色が変わる。

「わかってないようだから教えてやる。本来なら、おまえら鉄器は今の時代にあってはいけないもんだ」

頬の唾を拭うとそう言った。

「おまえらは、失われた前史の技術を偶然掘り起こした考古学者だが、それを使って作ったもんだ」

話を続けながら、レイリが立ち上がる。

「お前の選択肢は二つ」

少しゆっくり言いきかせるように……

「兵器として処分されるか、その腕切り落として人間として裁かれるかだ」

「知るか！俺達一般兵はそんな事も知らず」

男がごもつともな発言で返す。

彼の身に着ける衣服は、かなり痛んではいるが、レイリの着る軍服と同じ章が入っている。

元々この男が、レイアニア帝国軍人だった事を示さんとするように、レイリの青い目にも映っている。

「わるいな。私もその一般兵だ。今は、おまえらをぶっ壊すのが仕事なんだよ。」

そう言いながら、レイリは背を向けテントを後にする。

「どちらにしろ・・・俺は死ぬじゃないか・・・」

一人残された男が、消え入りそうな声でつぶやいた。

先ノ大戦

開発サレタ白兵戦兵器

人ヲ器ニ鉄機構ヲ組込セリシ躯体

通称「鉄器」

和平ノ下

撤廃条約締結セリ

各地ニ残留シタ鉄器ヲ条約ニ従イ

間章『尋問記録』（後書き）

ありがとうございました。

次回から第二章に入ります。

第二章 贖罪の名前〈part・1〉

「レイリ・ミドラ三尉、貴官は任務遂行にあたり、目的は達成していると言えよう」

戦闘用ではない軍服、散らばらないように縛った金色の髪。

レイリに対し、中年手前程の男は話を続ける。

「戦闘兵27名、指揮官一人そこまでは構わん。ただ貴様は物資のロスが多すぎる」

姿勢を崩さず話を聞くレイリ。それは立場差からだろう。

「いいか、貴様の任務は”いかに少ない負担で任務を遂行するか”だ」

数分話が続いた後、外の空気を吸い少し空を仰ぎ見るレイリ。

レイニアニア帝国軍本省

国城のすぐ近く、少し低い土地構えられた石造りの広い建物。

兵の訓練場からの勇ましい声が、レイリの休む中庭には少し聞こえてくる。

夕刻前の空はまだ青く、暑い季節を象徴する白く大きな雲が東からそびえる。

「レイリ、お疲れ様」

セレス。レイリの直属の事務上官。

背丈の低い彼女が地べたに座るレイリに降り注ぐ日を影にする。

「大変だったでしょ？」

「おまえほどじゃないよ」

戦地では無い場所。

レイリはそのまま仰向けに寝転がる。

少し傾いた強い日差しが眩しい。

「ふぁ」

早朝から呼び出され、直立不動の時間を過ごした疲れは戦闘のものとは違う。

緊張感の無い時間は意外にも気だるさを誘う。

自室の木戸を開け剣も携えず外に出る。

立て付けの悪い窓枠の外は暗い。

「おお、レイリどこ行くんだ？」

同僚と廊下で出くわす。

「いや別に。外見ようかなと」

「窓はお前の部屋にもあるだろう」

面倒そうに頭を掻き、同僚に対しジェスチャーで酒を誘う。

「珍しいな、お前が酒に誘うなんて」

「チッ」

舌打ちして部屋に戻るレイリ。

いくら軍人とはいえ、若い二人の女性が私服ではそこまで街中で目立つものではない。

レイリと同僚は少し騒がしい道を歩いていく。

「なんでお前なんか誘ったかな」

ぼやくレイリをニヤニヤと見る同僚。

レイリより少し背が高く、露出した肌に傷跡がいくつか見える豪快な雰囲気を感じさせる女性。

名をロレアという。

「どうせ落ち込んでるんだろう」

そう言いながらレイリの背を叩く。

周囲の人間が少し驚いて見る位強く。

「うわっ！ てめ、げほっ」

むせるレイリを笑うロレア。

舌打ちをして目的の酒場に向かう。

「おお！ロレア久しぶりじゃねえか！！ん？横の金髪はレイリか」
ひげを蓄えた男が迎える。客は他に二人ほどで、そう狭くない酒場は寂しく見える。

「だはは！戦争がないとおまえらは暇だなあ」

酒やけた大声が響く。注文も聞かず並々と注がれた濃い琥珀色をした酒が雑に出される。

「マスター、今日はレイリほつといてやってくれ。今から濃い〜
〜乙女トークだからな」

舌打ち、そっぽを向く。

「かわいいなあおまえさんは相変わらず！だはは」

「わはは、レイリ…おっ待て待て！」

カウンターを離れ店の端のすすけたテーブルに向かうレイリを追うロレア。

「で、どうしたんだ？鉄狩りがしんどいか？」

数杯目のおかわりに口をつけ無言の時間を終わらせる。

「別に。」

「ん、そうか。」

追求もせずグラスを傾ける。

「お、マスターおかわり！」

威勢よく呼ぶ。

「ロレア…おめえはペース速いからそんな端に座らんでも、ホレ」

先ほどの客も帰り静かな店内。レイリ達のテーブルに樽ごと酒を置くマスター。

「飲んだら適当に帰れ、俺は寝るぞ」

二人だけになるとまた少し店が広く感じる…なんとなくレイリはそう思う。

「どうした急に？」

「あ？」

少し顔の赤い酔顔でロレアを睨む。

「いや、何が広く感じる…だよ、お前がそんなタマか」

口に出していたらしい、酒とは違う赤面をする。

「なっ、なんでもねえよ！」

照れ隠しか、まだ八分程酒が入ったままのグラスを傾ける。

「お、おいレイリ！」

飲み干したままの体制で派手に後ろに倒れていく。

「うええー！」

静かな町外れ、宿舎の近くで吐く。

「飲めんくせに飲むからだ」

背中をさする。

少し落ち着き近くの木に寄りかかり体を休める。

星は雲に隠れ、今の季節の中ではマシな生暖かい風が吹く。

「なあレイリ、私も機制隊に入ることになったわ。よろしくな上官殿」

レイリの体から酔い後のだるさが消える。

「18か…？」

今月のはじめ、壊滅した第十六機制隊。

生還者のレイリを指揮官に新たに用意される18番目の部隊。

「そそ、死なない方法を教えてくれ、頼むぞレイリ」

そっとうと同僚は空を見上げる。

「鉄狩りは正直気分悪そうだからな、士気が下がると聞いている。まあ私たちは軍人だから…」

ロレアの話をおるようレイリが立ち上がる。

「十八は私は上官どころか指揮官だぞ？敬語使わなきゃ死ぬぞ？」
ぬるい風が強くなる。雨を呼びそうな雰囲気です。

「ぶ…あはは！」

ロレアが大声で笑う。

舌打ちで返すレイリだが、その顔は優しく見える。

「帰って寝ますかレイリ殿。あと少しだけゆっくりしよう」
歩き出す

「酔い醒ましてから寝るわ」

また木のふもとに座るレイリ

「今度はレイリが上官か。頼りにしてるぜ」

振り向かないまま手をあげ明かりの無い宿舎にロレアは戻る。

2

叩きつけるような雨降りしきる中、一同に整列する戦士たち。
甲冑から流れ込む不快な夏の気まぐれを意にもかいさず姿勢を崩さず待つ。

「戦後処理ではない、戦地に赴くと思え！」

部隊長を示す、深緑の盾を高くあげる。

「強い意志、統率、覚悟、の三つの雄たけびで答える兵

「進軍開始！」

号令とともに一切の乱れなく反対方向に一同踵を返し歩む。

「もう半刻ほどで完了します」

現地に着き、防衛柵の次に準備された隊長のテント内。

セレスによる陣の設営の進行具合の報告が入る。

強い雨が地面を柔らかくしたおかげで、予定時刻を少しだけ早める。

「セレス…私は」

カッ！！

「!？」

セレスの足が土の上に床として敷かれた木板を強くうつ。

「レイリ・ミドラ三尉、あなたは部隊長です。話は帰還してから聞きます」

遠まわしな激励、それは時として優しい言葉よりも、易しい。レイリは剣を携え完成しつつある一時的な根城の見回りに出る。

「レイリ部隊長殿！見回りご苦労様です！」

ワザとらしいロレアの挨拶に苦笑いする若き女性部隊長。

「作業完了したら休め。明日は晴れる、私と近隣搜索に出てもらうからな」

ロレアは作業の手を休め、そう言うレイリに敬礼を返す。

第二章 贖罪の名前〈part・2〉

3

眠い…

夏とはいえ木々に囲まれた高地。

朝露が空気を冷やす

眠いの目覚めてしまう

そんな時

レイリ・ミドラは第十八機制隊を任されるにあたり、一尉の階級を受け取る

隊長格にならないと使用されることが許されない深緑色
それが自分を馴染ませないのか

鳥の夜明け声が聞こえる

気の早い鳥だ

まだ東の空は、黒に薄くオレンジ色を忍ばせている程度
陣営に炊かれた火の色のほうが濃いと、ふと思う。

動きやすい戦闘用の服。睡眠のためにはだけいたボタンをしめる。

「そのまま続けてくれ」

この二十人ほどで構成された少ない隊。

兵たちはそれを補うように丁寧な行動をとっている。

見張りの若い兵士に声をかけレイリは自分のテントのほうに戻る。

「おはようございますレイリ。ほとんど寝てないんですね」

セレス・システィア

「おまえは寝てないのか」

「まあ、報告が義務ですから、今回は本団も近いので助かりますよ」
監視官、それがこの大人しそうな少女の役職。

彼女の所属は、レイリ率いる第十八機制隊ではない。

「まったく、無駄な上層だな」

レイリがぼやくのもわからなくもない。

レイアニアの古くからの伝統ともいえる軍事行動の一つ
必ずというわけではないが、

部隊に対し一つ『本団』と呼ばれるものが設営される事。

戦術向上のための記録業務

部隊の行動を前線に近づき可能な限り蒐集する特殊階級の連中

” 部隊撤退前には姿を消す ” 彼らとの面識はレイリ自身には無い。

「まあ、しょうがないですよ。私たちは軍人ですもの」
空がだいぶ明るくなる。

「前隊、これで全員であります」

レイリの前に並ぶ兵達。

「おまえ、年はいくつだ」

一人に聞く

「14であります！」

緊張したおももちで答える少年

「若いな……」

「隊長！質問があります」

口レアが割ってはいる、嫌そうな顔でレイリが顔を向ける。

「失礼ですが、隊長もお若いと思うのですがおいくつで？」

「あ？」

少し兵達の間から笑い声が聞こえる。

総員を半数にわけた前隊

七割近くが少年兵だ。

緊張感のある雰囲気が少しだけ緩和する

「笑うな！！！！！！」

レイリは少し下を見たまま一喝する

「貴様らは何を考えている。ただの戦後処理だと思っているならいますぐ除隊しろ」

動揺すらさせない雰囲気で、静かに、ただ全員に聞こえるように言う

「セレス、この中から三人、選んで私のところに連れて来い」
それだけ告げるとレイリは彼らに背を向け歩き出す。

気温が上がるのは早い。

テントの中も日差しの影響を受け、隔離された空気が肌にはりつく。
準備ができた事を知らせにきたセレスと二言程交わし、

己の剣を点検するように手にとる。

今より半刻程後、少年兵二人とロレアを連れ、近隣の偵察に出る。

歩き始めてすぐだった。

低木をかき分け山道に出たところ
レイリの拳が少年兵の一人をとらえる。

唐突に殴られた事に驚き声も出ない

「お、おいレイリ！」

思わずロレアが間に入る

「ロレア、おまえならわかるだろう、部隊長への言葉遣いも、この理由も」

黙る。

そのまま引き下がり、再度対面したところで、レイリは尻餅をついたままの少年の襟首を掴みあげる。

「聞け」

戦争を未経験のこの若き兵のミスは些細な事だ。

近隣の偵察、藪を抜けるその最中に彼の靴紐がほどけた。

「わかるか？」

レイリが聞く

それに頷く

「そうか」

もう一度殴る。左の手で襟首を持ち上げたまま。

「わかった程度では死ぬ。覚えておけ」

もう一度殴る

4

夕方、陣へ戻ったレイリはセレスと話していた。

「食事をとったら後隊から三人呼んでこい。偵察に行く」
蠟燭の明かりをセレスがつける。

「聞いてるのかセレス？」

「聞いてます、わかりました」
不穏な空気が流れる。

「ロレア…」

少し歩いたセレスは、余りの材木に座り食事をとるロレアの前で立ち止まる。

「どうしました？」

食べる手を止めず返答をする。

「レイリ部隊長が呼んでます」

そうセレスが告げる。

「部隊長が？ん、わかりました」

食べ始めたばかりのパンを置き立ち上がる。

その様子を少し不安そうに眺める顔を腫らした少年兵。

「何しに來たんだてめえは」

机に足をあげているレイリ、小刻みに踵を打ちつけながら。

「い…いや…」

今セレスの嘘に気がついたとしても何も状況が変わらないのはわかる

「なんだよ？」

「ま、まあいきなりそんなに怒るなよ」

ガスッ！

机が蹴飛ばされる。

「てめえ！いきなりそんな態度はねえだろうが！部隊長だからって
なんなんだよ！！」

「うるせえ…」

鋭い目線

「あああ！…！むっ…！かつく…！むかつくなレイリてめえは…！」

テントの外では大声に驚き集まった兵をちらすセレス。
小さな声でぼそっと

「たのみますよ」

そう微笑んだ。

単純な二人が殴りあいになるまでは、そう時間はかからなかった。
「ぶっころすぞ…！」

テントの外に転がるように飛ばされたレイリが砂埃をはらう。

「てめえは立場わきまえてんだろうな？」

「はっ！隊長だからって偉そうに…！おめえが新人のころなんざ…
つてえ！」

レイリが飛び上がるように顎を蹴り上げる。

「うるせえ…！納得できないなら厳罰だ」

腰の刀を抜く。

「このやろ…！本気だろうな」

ロレアも抜いた。

「ああ、本気だ」

早い踏み込み

下からの打ち上げにロレア剣は、手元から消える。

「ロレア、軍隊である事を忘れた阿呆はどうなるかわかるな」

ロレアの顔をつきあげるように、首筋に突きつけられたレイリの剣先
それでも睨み返す歴戦の目。

「はい、やめてください！」

急に止められる。

「あ？」

睨み合った二人が同じ方向を向くと、セレスがつかつかと歩み寄ってくる。

「えーっと…レイリ・ミドラー尉」

「なんだよ」

「私はあなたより階級が上ですね？」

「それがどうした」

話しながらもロレアが動けぬよう剣は静止したまま。

「はい、上官に対する言葉遣いが悪いです。レイリ厳罰」

場が凍る。

「あのなあセレス」

「はい、二度目。厳罰」

「おい！てめえなあ！！」

「三度目、厳罰」

そんな二人のやりとりを見てロレアが笑い出す。

「何笑ってんだてめえ！！」

「まあロレアはレイリの下官ですから今の発言はよし」
自信に満ち溢れた顔で淡々と返していくセレス。

「わはは！レイリ、セレスにはめられたな！！」

「はい、上官呼び捨ても対象です。ロレア厳罰」

セレスは最初からこうする気だったのだろう。

レイリは舌打ちをしてバツが悪そうに頭をかいた。

第二章 贖罪の名前〈part・3〉

一週間 戦闘はおろか、鉄器との遭遇すらも無い。

第十八機制隊

実戦未経験の兵が八割を占めるこの部隊が、訓練の為の模擬任務にだされているのであろうと

ロレアは少しばかりの退屈を思いながらなんとなく感じていた。

未熟者に様々な事を教える毎日。

そこで意外にも、一番はりきっているのは部隊長であるレイリ・ミドラ。

たまに怒鳴りはすれど、真剣に教えるその姿に、少年たちは憧れに近い敬意をもち

少しずつ学んでいった。

時折、訓練帰りの顔を腫らした兵を見ることがあったが、彼らの目は澄んでいて

確実に自分が成長していつている事を喜び、誇りに思っているのだろう。

文字通り、いい顔をしている。

「平和ですね」

汗を流しながら剣技を教導するレイリを眺めるセレス。

日は高く暑い夏日。それを優しくさえぎる木陰。

「まあ、いいんじゃないかな」

セレスの隣で座るロレアもレイリと同じく、戦闘経験者として若き兵に教える毎日。

自分の受け持ちを終え、レイリの様子を見に来ていた。

「ロレア！こいつらを連れて偵察に出る！準備しておけ」
レイリの声がかかる。

面倒そうに立ち上がり、自分のテントのほうに戻っていく。

「よし！おまえらも休め、四半刻後に出発だ！」

覇気のある声に思わずセレスが微笑む。

「おつかれさまですレイリ」

水に浸した布を渡す。それを首元にあて、暑くなった体を冷やす。
気持ちの良いひと時。

「セレス…あのさ」

レイリの声は柔らかい響き。

「はい？なんですか？」

「いや、なんでもねえ」

そう言々と自分の甲冑を装着する。

「レイリ」

今度はセレスが声をかける。

「ん？」

振り向いて見た顔。

背も小さく、戦闘には赴けない事務職の上官。

「ほんと、あなたは軽装ですよ」

レイリの装備は少ない。

甲冑は胸当てと肩のみ。

あとは革の手袋。肌の露出は少ないがその身を包むのはただの布。

「こんなんは飾りだよ、私にはな」

隊長として与えられた栄誉ある深緑の盾、それは一度もこのテント
内から持ち出されたことは無い。

偵察への同行は少年兵達にはもつとも望むべき事だった。

第十八機制隊の中で、戦歴のあるものを中心にした偵察隊は5つ。
交互に近隣の搜索を行っている。

その中でも部隊長とロレアの偵察に同行できることは、彼らにとって特に自慢できる事。

浮ついた気持ちを気がつかれぬよう少年たちは後に続く。

未熟とはいえ、レイアニア軍人だ。

この一週間を確実にものにし、様になる周囲への気の配り方。

正確に後ろの者に当たらないよう木枝をよけ、堆積した葉に滑る事も無い。

それでも偶然には逆らえない。

勇み足だったのかもしれない。

不運なのかもしれない。

自分だけ気がついていなかったのかもしれない。

そんな場面はすぐに訪れた。

彼ははじめて見た。

鉄と混ざりあつた人を。

腕が異形

足が異形

それは剣を持ち武装しているが、そんな事よりもその露出した体躯の不気味さ。

また一人の少年兵も思う。

自分たちに支給された剣。

目の前の化け物と同じような生き物みたいな、血管の這っているような剣。

でもそれは動かない。

強度が通常の物よりあると聞いている。

実際、木材相手に刃こぼれはしなかった。

でも目の前のそれは動いている。

食い込んでいるのは甲冑か、そんなような気がする。

肉との接合部は膿んでいるようなようにも見える。

「下がれ」

レイリの声が彼らを我に戻す。

「撤退しろ…走れ!!」

その大声に彼らは、一目散に來た道を走り出す。

「鉄狩りか？」

男が聞く。

レイリとロレア。二人に対し一人。

その質問の返答は即座に行われた。

一閃。

男の足首が、血液を巻くように飛ばし宙に浮く。

「ぐああああ!!」

レイリと同時にほんの束の間。

男の剣は ロレアに腕ごと落とされていた。

岩肌の斜面に金属音を跳ね返し腕は消える。

「声をあげるな、質問に答える」

そう告げられた男は黙ったまま頷く。

鉄器、彼らの”融合部”は総じて血液の凝固が早い。

致命傷であろう腕の出血も、もう静かに脈打に合わせてこぼれる程度。

追撃が無いかとロレアは周囲を警戒する。

「一人か」

頷く

「貴様らのアジトは？」

顔色が変わる。

頷くこともない。

「そうか」

「うあ！！！」

腰に据えた短剣を素早く抜き男の顔の横を走らせる。

耳が一つ、皮一枚で垂れ下がる。

「答える、そして声を上げるな」

返答は無い。

「……！！！！！！！！」

今度は声をかみ殺した。大腿につきささる短剣。

「答える」

ゆっくりと肉にもぐっていく刃。割れるように血があふれ出す。

「質問をかえよう、”あれ”はいるか？」

男だけに聞こえるように、レイリは小さく低い声で聞く。

「い…いない」

男は答える

「そうか。知ってはいるんだな？」

「んっぐ……！！！」

広げられる傷。

「全て話せ、貴様のアジトとどちらを話すのがいい？」

引き抜かれた短剣にヌラヌラと濃い赤が光る。

レイリが立ち上がる。

「ロレア、もう少し警戒の距離を広げる。これからは声を抑えることはできん」

10メートルほどはなれたところ、見晴らしのよさそうな場所を指す。

「さて、ここからは部隊長では無く、個人として聞こう」
レイリが鞘から剣を静かに抜いた。

第二章 贖罪の名前 part・4

その晩、第十八機制隊の陣営では、いつもより多く篝火が炊かれた。不気味に聞こえる炎の音。蛾が一匹、目前で燃え尽きる。

5

『レイリ・ミドラ一尉不在理由不明につき第十八機制隊総員待機』
セレスが総員を集め命令する。

「ロレア准士、こちらへ」
表情は険しい。

主が不在の隊長用テント。

レイリが使用していたとき、彼女の意向で守衛はいなかったが、今は六人がその周囲を守る。

「ロレア准士、もう一度状況説明願います」

あの日、偵察中に出会った鉄器への尋問中、レイリは消えた。ほんの一間だったのか、移動する気配もなく、尋問を受けていた鉄器は喉を裂かれ絶命していた。

「他に気になることはありませんか？」

眉間を指で押さえる。セレスの顔に疲れが見える。

「お話中失礼します、ご到着になりました」
隊にいなかった。

第十八機制隊とは別の制服の男に呼ばれる。
セレスがテントの外に出る。

重装の騎馬兵を従え、掲げられるレイアニア帝国の旗。

真紅の色が示すのは貴族階級。

「レイリ・ミドラを搜索する。付近の案内を用意しろ」
馬上から指示する男。

「ロレア准士、案内を」

質問することは許されない。

状況が緊迫している事だけはわかる。

レイリの行方が消え三日と半日。

夕立にあつた陣営に少年兵の姿は無い。

皆、撤退を命令され戻ったのだ。

セレスは陣の中を歩く。

交代するように来た貴族隊。

「…」

元の陣はほとんど片付けられ、まだ残っているのは、レイリとロレアの使用していたテントと防衛柵だけ。

空いた地にすぐさまたてられた、少しだけ装飾の多いものたち。

「まったく、良いテントですなセレス殿」

ロレアは現場に残る数少ない第十八機制隊の人間。

「貴族の直属隊ですからね」

顔色の優れないセレスに紅茶を渡し、あいた手で煙草に火をつけ吸い込む。

「レイリはどこまで上り詰めたのかね、こんなえらいさんに探されるんざ」

それは独り言のようにセレスには聞こえた。

吐き出す煙が風の無さを物語る。

ロレアはかつてレイリの上官だった。

入隊したばかりのレイリを指導していたこともある。

そのことはセレスも知っている。

「まったく、あいつは最初からセンスよかったからなあ、強い」
鷲が鳴いている。

「そうですね、レイリは強い」

空は広くひたすらに青い。

数日後、意外にもレイリは見つかる。

見つかるというより、戻ってきたという表現が正しいかもしれない。
しかし、そのすがたは消耗をかんじさせ、まだ生々しい傷を隠すはずの衣服の痛みも酷い。

「レイリ！」

セレスとロレアがかけよる。

ロレアだけが兵に止められる。

「おい！なんだこれは！！」

きつとこの男たちの兜で隠された表情は、変わっていないのだろう。
当たり前のように、ロレアは後ろに下がらされる。

結局レイリが戻り二週間。

ロレアがレイリと会話をする事は一切無かった。

あの後は何も無く、ただその場にいななければならないだけ。

もしかしたらあいつは先にここを離れたのか：

そう思えるような気がする。

程なくして、帰還命令が出る。

荷物をまとめる。

何がおきているかを考えるのは、あまり良い事ではない。

ただ”たかがレイリ一人にあの重装の兵”という疑問点は燻るが、それは声にしてしまうのは、少し悲しさに近いような感情。

「おい、何しよげてんだ」

ふりむく。

夕方の逆行が眩しい。

「レイリ……」

包帯が痛々しい。

殴った。

理由なんて考えても無い。

ロレアはおもいつきりレイリを殴り飛ばしただけ。

「って……！てめケガ人だぞ……！」

すぐに駆け寄ってくる貴族の飼犬達、ロレアを地に押さえつけるため、厳しい兜で顔を隠した者たちが周りを囲む。

「やめろ」

レイリの一言に皆の動きが止まる。

何事もなかったように、ロレアは開放される。

「なんだこれは？え？おまえが上官になった、それはわかる。けどなんだこいつらは……？」

ロレアは喧嘩腰だ。

「レイリさんよ？殴り合いじゃお前は私に勝ったことないよな？」

何度目だろう。

口の中がジャリジャリする。

ふらつく足で立ち、拳を硬く握りぶつける。
ただそれだけ。

その度に空が見える、そしてすぐ地面。

ロレアが立ち上がり、殴りかかる。

それを何度も、何度も繰り返している。

「くそ……おまえそんなに強くなつたか」
また立ち上がる。

「お前が弱いだけだ」

今日、初めてレイリから間合いを詰める。

高く振り上げられた拳。

「ちくしょう」

突っ伏して動かなくなつたロレアが目を覚ますと、そこは自分の部屋だった。

確認しなくてもわかる。

隣の部屋は、もう空室だ。

第三章 無力な実力 part・1

レイリ・ミドラは軟禁状態の部屋から外を見る
あてがわれた部屋は、軍部本省にあるだけの普通の部屋。
彼女にとってこんなところから出るのは容易だ。

正直、もう嫌ではあった。

第十八機制隊の少年兵たちは何をしているだろう。

ロレアは何を思っているのだろう。

そして私は彼女ほど、物事を考え見た事などないのだろうと

力と立場

それがレイリを責める。

戦闘用ではない衣服はこんな肌触りなのか。

1

ロリック中将

大戦、戦後共に彼の功績は大きい。

下級貴族の出身である為、階級すれど中将だが、一番大きな隊を持つ。

そんな無骨な雰囲気にする男と話すのはセレス。

「そうか」

一通り話を聞き終える。

「それで、ロリック中将、あなたは如何思われますか？」

テーブルに置かれた紅茶は手をつけられていない。

「機制隊を俺の指揮下にいれるのは不可能だ」

わかっていたとはいえ失意の色は隠せない。

「ロナ・ハルドか」

その名前を聞いたからか、落ち着けようと紅茶に口をつけるセレス。「俺がレイリと話す。しばらくお前はおとなしくしてろ」

そう言うところリックはその場を出て行く。

「ハルド…」

セレスの表情は複雑だ。

不快のようにも、古き友人を思い浮かばせているようにも見える。

「リック中将、困ります」

レイリ面会を止められる。

その部屋の戸を守る守衛も、リックがいかなる存在かは熟知している。

それ故彼は申し訳なさそうに頭を下げる。

「貴様は貴族か、それとも軍人かどちらだ」

低い声。

攻撃的な雰囲気は一切ない威圧感

「心配するな」

そう言い木戸に手をかける。

「久しぶりだな」

レイリは予想もしなかった客に驚いているようだ。

「ちつ…どうせセレスだろ？」

「それはある。ただ俺の個人的な用もある」

この男は嘘を言わない、そう納得するしか無い相手。

「たく…私ごときに ほんともてなしてくるよこの国は」
ふてくされたようにベッドに寝転がる。

「自覚が足りないのはわかるが、あつたところでおまえには把握は
できん」

そんな事はわかってると背を向ける。

ロリックが部屋を出ると、それをまちかまえる初老の男。

「ロリック、貴様何をしているのだ」

高級身分、勲章で輝く軍服。

「レイリ・ミドラはこちらの管轄だ、貴様には関係のないものだわかつているだろう？ わかったのなら下がれ」

レイリ・ミドラ並びに機制隊

それは通常軍部所属とは違うもの。

正直、軍事に関しロリックが干渉できないものは少ない。

この男は実力で身分の壁を乗り越えた。

ただこの件に関しては”勝手な訪問を不問”にする程度の存在。

2

季節は秋の半ばになっていた。

軍部本省でも隔離された場所。

石造りの少し広さのある空間。

レイリはそこにいた。

「レイリこれを」

セレスに渡される剣。

手入れの行き届いた愛用の剣は久しぶりにもかかわらず手に馴染む。

セレスが下がる。

高く、外界を遮断するような石壁は空を狭くする。

「レイリ・ミドラだね？」

その空間には二人。

レイリと、いけすかない顔をした男。

二人が剣を構える。

先に動いたのはレイリ

ここでは何も気にする必要は無い。
駿足。

普通の人間では気がついたときは死んでいるだろう。
そんなレイリの本当の力。

「強くなった」

男は縦にその攻撃を受けたまま会話を続ける。
離れ、ぶつかる

パワーバランスのとれた戦い。

「レイリ加減をしているのかい？」

男が剣を投げ捨て、武器の無い状態をアピールするように両の手を
広げてみせる。

「コアはいくつ集まったかな？」

レイリが前に出る。

さつきよりも速く、そして強く。

男の首が飛ぶ

剣を収め、背を向ける。

「あは…あはは！！」

声

落ちた首が笑う。

しばらくその閉鎖された場にその声は反響する。

「レイリ、研究は順調だ。おまえが言う事を聞いてくれているから
な」

男の口調が変わる。

「伝言だレイリ、ロナ・ハルドからのな」
顔色をかえさせるその名。
強い殺気がレイリから滲み出る。

生首の講釈はそう長くは続かなかった。

失血していくようにその声は薄れ次第に消える。

「覚えたかレイリ？……セレスも聞いてるな？」
それが最後。

笑い声も無く静かになる。

「レイリ……」

セレスも不安を隠せない。

グジュ…

レイリが喋らなくなった生首の頭を開く

ビチ

触手がその傷口から跳ねて奥のほうにもぐっていく。
剣を置き、捲れた頭皮をを両手でさらに剥がしていく。
ドロドロとしたものが血に混じり流れ出してくる。
不快な匂いにセレスも顔を背ける。

「ちっ……」

割れた頭蓋から見える中身
鉄の球

「コア・シリーズ……」

「ならぬ!!!」

額に浮いた血管ははち切れそうだ。

「しかし、今回の要求はロナ・ハルド…」

激昂した男は机の上の花瓶を叩き落す。

「うぬぬ…セレス!!! 貴様らはどちらの見方だ!!!」

セレスとレイリは自分達を所有する男の部屋に来ている。

高級貴族のこの男こそ、コア回収を管轄に置いている者。

融通のきかなそうな事は誰が見ても手に取るようにわかるだろう。

「レイリを手放せば、わが国にコアシリーズは存在しなくなるのだぞ? あまつさえ回収したコアをもってこいだと?」

そのような要件を飲める程、戦後とはいえレイアニアと隣国スレイドの関係は良くは無い。

「それにだ…」

レイリを睨む。

「貴様は信用できん」

怒る気持ちを腹に収めレイリが発言をしようとするがセレスがそれを止める。

「ロナ・ハルドはレイリの同行者として、それなりな立場の人間を要求しています」

「わ…わしはいかんぞ!」

この臆病な指揮官にレイリはうんざりする。

いつもそうだ。

この男の見栄の為、兵は死ぬ。

たまたま、生まれの良さだけでここにいただけの豚。
必要の無い軍部。

「そこで、提案があるのですが」

セレスは自信ありげに話し始める。

「俺がああ男の所属か」

ロリックがぼやく。

セレスが申し訳なさそうにしている。

「仕方ないだろう？ おまえぐらいなら気楽だしな」
レイリが装備のチェックをしながら言う。

「どちらの意味でだレイリ？」

それを聞くと少し不機嫌そうにだまるレイリ。

「あ、ちよつといいですか？」

ロリックを外に連れ出すセレス。

「今回は…お願いします」

深々と頭を下げる。

「すまん刺激しすぎた」

そんなロリックに胸を撫で下ろす。

正直、レイリにとってもいいのだろう。

無能な命令、体裁、そのためにレイリの同行者は高い確立で死ぬ。
コアの回収。

その為には必要の無い者も必要とされる。

スレイドとの国交バランスを保つ為には、死んでいく頭数が無ければならない。

世の不条理

バランス

理解できないだけの物事

「どれだけ死んでも成し得なかった事に届くかもしれません」
セレスはそう告げる。

ロリックは思う。

己の価値。

この任務で死ぬのであろうかもしれない。

条約内での自分は強い。

ただ、今回はスレイド領内

それは締結されている条約の中で許可はされていない。

隠密

大隊を率い、次の大戦がおきたとてレイアニア帝国を焦土にする事は無い。

ただ今回は違う。

目の前の少女が、”交換条件”として差し出した首である事くらいは察しがついている。

確かに、自分がいなくなればあの無力な卑しい貴族の下この国の軍事は動くだろう。

過信はしていないつもりだ。

ただ、今のままでは何も変わらない事くらいはわかる。

やつらの言う『損害を考え互いの国の為のコアの回収共同線』など
はれるわけでもなく

実現したとてそこまでこちらの国に都合よく進むわけではない。

今回の為にと手渡された木箱

その中の注射器

それすらせめてもの進展に見える今を変える兆し。

「セレス、俺は命令で動く」

セレスは黙してその顔を見る。

「これ以上はこの国は何も変わらない」

情にほだされたわけでもない。

損害を表現する為に死地に向かわされた者達を思うわけでも、

それを背負わされ守ろうとしたレイリを不憫に思ったわけでもない。
己に問うた。

ここは停止線ではないという事。

第三章 無力な実力 part 2

リズム

それを乱さない戦闘等至難の業

歴戦の者であればあるほど、状況、体力、地盤：全てを把握し体を動かす。

では、あれは何だ？

4

国境がだいぶん近づいた

そのエリアにゲリラは多い事等当然のこと

遭遇してもなんら不思議ではない。

ロリック程の者であればただの鉄器等”少し頑丈”なだけの敵。注意深く確実に急所を狙えば問題なく倒せる。

でもあれは違う。

片手で振り回される剣

甲冑ごと腹の中身を地に張り付け、重量のある斧を奪い投げあんなに遠くの敵の喉を割る。

なんなのだあれは。

優れた戦闘技術ではある。

片足を軸にうまく体を振り、効率よく敵を落とす。

ただその動きは止まる事が無い

情報と現実の差異はこのように映るのか。

心臓、頭、喉 誰もが考えうる急所を確実に当てている。

ただ鉄の体、鎧、盾 それらの存在がまるで無いもののような剣筋。

あまりの速さに体の中身が弧を描き、彼女の動きを表現する。

レイリ・ミドラ

その本来の力での戦闘。

奇妙な二人旅だ。

機密のレイリ、実質軍部の最高峰の実力者ロリック。

夜の森で焚き火を囲む。

沸いた湯を飲み体を癒す。

「なあロリック 如何思う？」

「何をだ」

ふいな質問

「私だ」

梟が鳴く。獲物でも捕らえて喜んでいるのか。

「簡単なことだ。戦争は終わったのではなく、かたちをかえたという事。俺のやる事はかわらん」

「おまえはほんと自分の意見をいわねえな」

レイリは体を起こす。

「私は今やおまえより国に大切にされている、たかが一個中隊を壊滅させれる程度の私が」

「そうだな。俺の隊であればおまえを抑えることは可能だろう」

舌打ちをするレイリ。

そのロリックの計算は間違っていないだろう。

「おまえの部隊に私が欲しいか？」

「いらん」

つまらない男だ、そんな事を思いながらレイリは火にくべてあった干し肉をとり齧る。

「おまえはどう思っているんだレイリ」

らしくない。

お互いがそんな事を思ってしまうような会話だ。

「今…今ここにいる以外の選択は、今以下だって事だな」
夜の空気はもうだいたいぶ冷たく澄んでいる。

「ロナ・ハルドを殺したいか？」

レイリの目つきが変わる。

その目は空を見ているのか。

「ああ…殺したいさ…」

「殺せばいい。たかが一個人が国に制約を持たせるなどくだらぬ話だ」

「てめえに何がわかる」

レイリに殺気がやどる。

「やめておけ、今のお前なら俺をすぐにでも殺せる力がある」

風がぬけていき火をゴウと鳴らす。

レイリは無言で食事の続きに戻った。

軍部本省、セレス自室。

「…ハルド」

ぼんやりと空を見る。

レイリとロリックが出て行ってから彼女の職務は無い。
ただ時間をすごす。

それだけ。

そう自由な毎日は送れない。
自室から出る事はよく思われない。
それと同時に外に出たいとも思わない。
何も思いたくないとも思わない。
なにかができるとも思わない。

レイアニア帝国とスレイドは長い城壁で隔たれている。
古来より存在した遺跡とも呼べるそれ。
「いつ見ても気のいいものではないな」
レイリは少し離れた小高い丘からそれを見ている。
「確かにな」

もつとも激戦がおきた場所。
思い出したくない事もあるだろう。

「レイリ、第十六機制隊はおまえは所属していたか？」
ロリックは問う。

レイリは答えない。

「あの壁を越えたらこんな話もできん、教えろ」
あの壁の向こうはスレイド。

「何故聞く？」

「現場から撤退していった兵達、彼らを俺は殺した」

コアシリーズの襲撃、その場でレイリは生き残った兵を逃がした。

「…そうだろうよ」

驚きもしない。

彼らは不幸だ。この中將すらはじめて見た存在を見てしまったのだから。

「罪の意識で戦うか」

「いや、残念だけど死んだものに興味は無い」
城壁を目指して歩き出す。

「ロリック、お前はとうせハルドが生きていたことくらいは気がついてたんだろずっと」

ロナ・ハルド

鉄器、レイリを含めたコアシリーズの母。

あの鉄球の発掘者、全ての根源。

戦争中、スレイドにて捕縛処刑されたと皆は知る。

「わざとらしかったぞ、お前にしては」

今回の命令を受けたとき、はじめてロナ・ハルドの生存を知ったとロリックは言った。

あの諸悪の根源が生きていると、

そして今回の任務をうける事を誇りに思うと自分の隊を置いて出てきた。

そんなのはあの下種な貴族を喜ばせる建前だ。

「お前、生きて帰る気だろう？」

その問いに否定はしない。

「つたく、仕事が増えるぜ」

レイリは姿勢よく剣を抜き確かめる。

「頼むぞ」

鞘にしまう音。

その音は心地よい。

ロナ・ハルドは夕暮れに思う。

愉快ではないが不快ではない。

国に自分の要求を突きつけれるのは、とてもくだらない理由だとしても。

いつだってそうだ。

レイアニアにこの素晴らしい発見を教えたときもそう。
スレイドに移動して戦争を激化させたのもそう。
彼らが互いの策略の為、そして自分を手に入れる為に、戦争すらこの世界から奪ったときもそう。

興味が無い。

これから来る来訪者。そしてそれを送り出した者
そちらのほうは何よりも面白い。

どうせあの特権階級の男は、
狭い考えでレイリと同行させるものは一番心で欲しい者を連れさせる事で手を打つだろう。

それは確実な事だ。
欲しいものが手に入らないとしても、
少しでも自分にとって良い選択を探そうとするのが、ああいった人間の性質だ。

セレスはきつと今もかわらずだろう。

レイリは虫けらのように歩いてくる。

死を求められた男は誰よりもわかっている。

古びたテーブルに小さな器が三つ並んでいる。
それらの置き位置を入れ替えながら。

長い漆黒の黒髪。

整った顔立ち。

器はずれること無く正確に元に戻される。

第三章 無力な実力 part・3

「おまちしていました」

城壁の手前。

ここはまだレイアニア領

年端もいかぬ少女がレイリ達を出迎える。

気配に気がつかなかった。

警戒するレイリ… そしてすぐ気がつく

「コアシリーズか」

「そうですね、おねえさま」

深々と挨拶される。

レイリより後の時期に作られたのだろう。

だから『おねえさま』

気に食わない。

それでもレイリとロリックは黙ってついていく。

少し歩いた。

城壁の下の門を抜ける。

軍部さえ不可侵なこの壁をこつても易々と通られるのは異常なこと。

むろん、壁を挟んだ双方には、本当ならばそれぞれの国の兵が警備を怠らない事は当然。

そんな綱渡りのようなバランスの地域のはず。

レイアニア帝国側は確かに”ロリックがその場にいる”という不可解さを波紋させない為、

一時的に兵を移動させておいたのは事実。

でもここはかつての敵国スレイドだ。

互いの決め事のおかげで、線を越えたものは階級など関係ない。
国王の証文でも持つているならいざしらず
今回の国境越えは無断なのだ。

では何故、こんなに静かなのか。

ハルドは指定した。

レイアニアの軍服を必ず着てこいと。
それ故にロリックは死を覚悟していた。

そして自分の奉仕し続けた国は、万が一捕虜になるくらいならと、
手土産すら持たしてくれた。
木箱の中に入った注射器。

戦時中から己の顔を敵国に売る等、愚かしいことはこの男はしなかった。

指揮官になった一番初めから最前線に顔を晒さず、それ故に的確な
任務をこなした。

今スレイドに捕縛されれば一兵卒として処刑されるだけだろう。

だからこそ己が選ばれたとも思う。

顔の知れたものでは、国交にすら問題がおきかねない今の不安定な
情勢

時折双方の兵の国境越えはある。

互いにそれを黙殺する背景が存在している時代。

それ故に、いざとなれば切り抜け安いとすら思っていた。
それでも生き残り帰る可能性は低い。

そしてレイリ・ミドラの能力に期待した。
賭けたのだ
己の生命を。

それなのに、この静寂。

深い森を少女がぴょんぴょんと跳ねるように先導していく。

「わかるかレイリ……」

ロリックが囁く

「ああ……後ろに二人」

影をひそめついでくる気配。
下手に動くのは危険だ。

少女が立ち止まる。

「おねえさま、第一問」

追いかけてくる気配も止まる。

「おねえさまとそちらのおじさんはこれから別行動。なんででしょうか？」

「ハルドの要求か？」

「あゝおじさんが答えたらだめ！でも正解！次はペナルティだよ？」

少女がニヤリと笑う。

ロリックの手をひき、少しレイリから離れる。

「あ、これは渡しといてね」

レイリに少女はかけより、その腰の革袋をはずす。中身は鉄球……コ

ア。

この距離なら…

一瞬レイリの本能が働くが、状況を考え攻撃を控える。

「じゃあね！おねえさまは少しそこで立ち止まってね！」

「いつまで隠れてんだ、私に用があるのはおまえらだろ？」
後ろの気配二つに話しかける。

「久しぶりねレイリ」

肩でそろえた黒髪

すらりとした肉体。

「ちっ…マリアか、てことはもう一人はアリスだろ」

マリア、レイリは互いを知っている。

「えへへ…ひさしぶりだね劣化品ちゃん」

甘ったるい声のグラマラスな女性。

大人っぽい雰囲気は無く、腰まである長く明るいブルーグレーの髪を揺らして現れた、アリスと呼ばれた女。

レイリの顔に浮かぶ色は、苛立ちや等が混ざり複雑。

「剣を抜きなレイリどのくらい強くなったか診てあげるわ」

マリアが腰の剣を引き抜く。

レイリの即座の反応、間合いをとり構える。

その状況にアリスの顔は満面の笑み。

レイリの”対鉄器用の剣”がどう見ても、ごく普通の剣に簡単にいなされる。

「が…」

膝、綺麗にみぞおちにうちこまれ悶絶する。

一撃で地べたにはいつくばるレイリ。

「少しは強くなったみたいね」

マリアは剣を納める。

どごー！！

横腹を蹴り上げる

胃の中身が噴出すようにぶちまけられる。

「レイリ、あなたはハルドのお気に入り。壊しはしないわ安心して」

ドコー！！ドコー！！ドコー！！！！...

跳ね上がる体

「はひゅー！ ふっ は」

呼吸ができない。

ドコー！！ドコー！！ドコー！！...

「あははー！！」

アリスは笑い楽しそうに見つめている。

「ねえおじさん」

少女が見上げるように話しかける。

「なんだ」

「おじさんは偉い人？」

首をかしげながら。

「どうだろうな」

相手にしていられない。ただ相手にするしかない。

「わたしはね 蠅なの」

風で前髪が少女の顔を隠す。

「蠅なの、私は生き返った蠅。死体にたかる蠅」

ただの子供では無い事くらいはわかっている、ただこの異様な雰囲気。

危険である事は必須。

コアシリーズであろう少女にロリックでは太刀打ちできない。左側の急斜面、あそこに身を落とせば回避できるだろうか。

「蠅はね、生きててもたかるんだよ？死んでなくても」

注意を周囲にもむける、風のざわめき。

「私は蠅なの」

「ここね」

下腹部に手をあてる

「ここに蠅の卵をいれてもらったの、だから…」

「……!!」

少女が不意に手をつかむ。思わずその手を下げてしまう。

「わたしの名前だよ？私の名前は蠅。あなたは……なんて名前？」

「ロリツクだ」

冷や汗を感じながらまた連れられ歩き出す。

蠅編 part・0 オープニング

「そうか、お前がロリックか」

ロナ・ハルドは意味ありげな笑みを浮かべてそう言った。

「自軍の兵のみに顔をみせ士気をあげる。敵には名だけを轟かせる
……」

おまえほど戦争に長けた男もそうはいないだろうな」
小さな家。

民家となんらかわらない。

周囲には他に建物は存在しない森の中。

「蠅」

ハルドが少女を呼ぶ。少女が渡した革袋、その中身を取り出し確かめる。

「レイアニアにこれは今いくつあるか お前は知らないだろう？ ロリック」

「図星だ。まず」レイリがコアをいくつ回収したのか」それは自分の管轄でもなく隠蔽された事実だ。

「鉄器の利点は何だと思う？ おまえの意見が聞きたい」
そういうとコアを革袋にしまう。

「私の質問に一つ答えれば、一つお前の質問に答えよう、今夜はそれを繰り返し互いの交流をはかるんじゃないか」

ハルドが銀の器にぶどう酒を注ぐ。

「慎重だな」

質問された”鉄器の利点”それを答えたあと、ロリックが返した質問は同じ内容。

「私も同じ意見だ。彼らの利点は見た目が人と違うこと」

鉄器 彼らの体は鉄が混ざる。

その融合部はまるで膿んでいるよう、体の部位にもよるが一目でその存在はわかる。

「戦争では実際の戦力と、精神的な戦力は違うものだろうロリック？」

答えることも無くうなずく事も無く。

現に鉄器兵は通常の人間より勝る、ただその差はそう大きなものではない。

姿見に恐れることの無い男からすれば所詮人 そういう印象なのだろう。

「では私の次の質問だ。鉄器兵の作り方は知っているか？」

「それは知っている」

「そうだろうな」

わざと聞いたのだろう、それで動揺するような人間では無い事くらいハルドもわかつている。

それ故に口元に浮かぶ笑み。

「レイリ・ミドラ あれは何故コアシリーズにした？」

ロリックの質問の番。

ハルドが笑う。

その質問をまっていた というように。

「レイリか、あれは たまたま だ……く……」

蠅の名をもつ少女もつられて笑う。

「くだらない質問ごっこはやめよう、教えてやる」

ハルドがぶどう酒に口をつける。

濃い赤の酒が、唇を妖艶に光らせる。

「レイリをえらんだ理由に関して、一ついうなれば阿呆だからだ」
上機嫌に話す。

ケタケタと笑う少女 蠅。

革袋の中から、再度コアを取り出し机に置く。

「戦争 貴族 国 それらは同様に意味が無い

これは古代の王国のものだ この程度のものが今我々の世界を歪ませる

それほどの国は今が無い それが歴史 くくく…」

ロリックは不快であろう。

低級貴族の身ながら、武の面において国を守護してきた男。

「まあ聞け コアシリーズと呼ばれるおまえすらも初めて見たものそれは簡単には作れないし それすらも意味が無い」

「私のもつ鍵がなければ、作れないものである事くらいは察しがつくだろう？くく…」

『伝言役を使用したコア一つだけを持って来い』

レイリが首を落としたあの男のコア一つだけを要求された今回。

そこに裏が無い等誰も思わないだろう。

焦らされている。本題を答える気はあるのだろう、ただこの時間をハルドは楽しんでいる。

だからこのように遠まわしに言うのだ。

「顔に出さないのはさすがだ 簡単な話だ、私を殺してそれを奪えばすべてが終わる」

蠅がその発言を聞いてロリックを睨む。

「心配しなくてもいい、この男ほどであれば私が何故生存できるくらいはわかっている」

宥めるハルド、ただその顔は喜びともつかぬ笑みに満ちている。

「ロリック、レイリが戻る前にこの子にお前の説を話してやれ、それが正解だ」

そういうと奥の部屋にぶどう酒をもちハルドは下がる。

「ほえーおじちゃんすごい！」

ロリックの目の前のこの少女。こうして話しているとただの子供だ。

「あのね あのね、あいつはすぐ子供がすきなの！だから」

耳を覆いたくなるだろう。

スレイド国の中枢がこの幼子をよってたかって犯した事実。

そしてそれがただの嗜みである事。

「だから蠅の卵を植えつけたんだ」

スレイド 民族性が高く誇り高き国。

国力はレイアニアに劣るがその気質故に長引いた戦争。

その国はいまやハルドの包囲網。

少女の話は想像どおりの答。

ハルドの策略、スレイドの頂点、もしくはそれに相当する人物を抑

えている。

コアを埋め込んだ。

そしてなんらかの方法で『ハルドがいなければなりたたない命の

状態』にした。

家の戸が開く

二人の女がレイリとともに入ってくる。

レイリの意識は無い。

「ロリック中将か、用件はすんだ。持ち帰れ」

床に投げ出されたレイリ、上着はほぼ無いにちかいくらい破れている。

その背中

鉄器の肌の様相

それともまた違う

背骨を中心に這いずり回るような何かが広く浮き出ている。

「やっぱり未完成は汚い」

蠅が顔をしかめる。

「レイリは途中でやめたのさ、見て無い事にしといてやんな」
マリアはそう言う外に出る。

「ねえ！」

いきなり顔を近づける、レイリを運んできたもう一人のグラマラスな女。長い髪が顔に触れる。

アリス 息が届きそうな距離の端正な顔。

「セレス様は元気？」

その銀色の目は、殺意でロリックを見ている。

「ああ」

「よかった」

ニコリと笑うとアリスもその場から消える。

「待てロリック」

翌朝、意識の回復したレイリとレイアニアに戻ろうとした所をマリアが止める。

レイリは背を向けたまま立ち止まっている。

「交換してもらおう、ハルドの要求だ」

ハルドとレイリは顔を合わすことは無かった。

レイリは唇を噛む。

「何をだ」

検討のつかない要求に聞き返すロリック。

「木箱だ、受け取っただろう？」

レイアニアを出立する際に受け取った木箱。
捕虜になる前に死ぬためにわたされた毒薬。

「おまえですら気がつかないのは仕方ないな」

マリアがそれを受け取る。

「これはコア内部の溶液だ。一時的に人間を私たちみたいにする」
レイリが振り向く

しかし その手は剣を抜くこともできない。

その行為は無意味でもあるし そして無力でもある。

マリアはレイリを無視して話を続ける。

「コアの事は解明されていない、当分いろいろ試させてもらいたい」

「それもハルドの伝言か」

マリアが頭を掻く。

「いや、これは私の個人的な意見だ レイリが”未完成”なのも試している事、そのすべてが大切だ」

レイリが睨む。奥歯を噛む音が聞こえる。

「これ以上は限界だなあ、交換の品だ もっていけ」

マリアが面倒くさそうに話を終わらせる。

交換の品それは 蠅という名の少女。

蠅編 part・1

1

レイアニア領までは何も問題なく到着する。

それがハルドの計画の完璧さを物語る。

両国を隔てる長い城壁

そこから数キロ進んだあたり。

綺麗な清流。

「レイリ！」

ロリックの制止も聞かず、レイリが剣を抜く。

「あれれ？」

その標的 ” 交換で受け取った少女 ” そのまだ幼さの残る彼女は
自身の名前を ” 蠅 ” と名乗る。

「ここで処分させてもらう」

双方あの鉄球を体内に持つコアシリーズ。

ロリックでは止められぬ。

兵としての経験など皆無に近い少女にレイリの剣が叩き込まれる。

「ああああっ！」

鎖骨のあたりから胸 引き裂かれ赤黒い内部が覗く。

「おねえちゃん… 痛いよ」

触手のような蠢く細いひも状の何か。

それが傷口を修繕する。

「いじわる」

レイリは寸でで避け、腿を軽く切る。

武器を持たぬ少女がただ殴りかかっただけ。

触れかけた拳の威力なのか

空圧で、服が裂け血が流れる。

いつになく距離をとるレイリ。

「途中の子はなおるのが遅いね」

あの骨も切断したであろう深い傷がもう塞がりかけている蠅。

レイリの出血はまだ続き、澄んだ水に溶けていく。

「途中……」

ロリックはあの背中を思い出す。

レイリの背中 of 這いずるように盛り上げていたあれは、今しがた少女の致命傷を塞いだあの触手かと。

レイリの傷の塞がり始めている。

あの鉄球の本来の使用法はこれか。

ロリックはあの凄惨な光景を思い出す。

間章『鉄器兵の記憶』

腕に甲冑をはめられた男が椅子にしばりつけられている
嚴重な警備下のその部屋

男は望んでそこに座り固定されているのだ。

その前にも男が一人

顔を布製の覆面で隠した、体格の異常にいい男。

椅子の男に近づくその手には

仰々しい巨大な鋏のような仕組みの器具

その先に、しっかりと収まっている鉄球

なにやら不可解な文様が施された鈍色の。

それは拳より少し大きいくらいか

縛られた男の腕に鉄球は近づけられる。

横にした状態のその大鋏は、持ち手である覆面の男を、3 m程後ろ
に位置させる。

持ち手の長いその道具は、鉄球を何かするために作られたのだろう。

器具を操作し、中央にある蓋のようなものをこじあける。

飛び出してくる無数の触手

ヌラヌラと輝き彷徨う。

刹那の動き。

触手が突き刺さるように椅子の男の甲冑を貫通する。

酷い叫び声が響く。

溶けているのか、かき混ぜているのか。

外側から、内側からその触手は滅茶苦茶に暴れる。

覆面の男が足を踏ん張り大粒の汗を流しその行為を支える。

これほど体格の良い男が必死になる原因が

器具の重量だけでないのは、椅子ごとのた打ち回る男を見れば明らかだ。

触手は離さない。

あんな小さな鉄球の収まりきらないような程伸び、腕を侵していく

椅子は壊れ男が解放されても尚それは続く。

声にならない声が血反吐とともに吐き出される。

甲冑はもう無い。

人の腕でもない。

鉄器

鉄が歪に混ざり合うその腕。

鉄器になった男の喉の下あたりから触手が飛び出す。

そのタイミング、無理やり引き剥がすように大男が鋏を振る。

触手は抜け、あるいは引きちぎれ勢いあまり空中に放り出される大鋏。

鉄器となった男は痙攣したまま意識があるかどうかもわからない。

触手は止まり知らず、今度は大鋏を滅茶苦茶にする。

丸一晚

鉄球が何事も無かったように元に戻るまでの時間。

転がるその床

隣には血管の這うような様相を残した変形した大鋏

「おねえちゃんが大人しくなった」

白目を剥いて倒れるレイリ、水流の中からロリックが担ぎ出す。

剣は拉げ、沈んでいる。もう使い物にならないだろう。

「あんなもんに頼らなきゃならないなんておねえちゃんかわいそうだね」

蠅の衣服もぼろぼろで幼い体が顫わになっている。

レイリと違い普通の体。

それだけでは、ただの人間にしか見えない体。

鉄器の戦時における利点、それは畏怖。

人と違う異形の恐怖は、敵の士気を下げ、味方に不可思議な自信を持たせる。

その逆。

コアシリーズ、その恐ろしさは見た目が同じ事。

現在 何人存在するのか。

ハルドの話では出土したコアは、全てで56。

出土元でる古代文明に祀られていた星の数と同じ。

その中央星にあたるものをハルドが所有しているのだ。

それがいくつ、その星を埋め込まれた人として存在しているのか。本来ならこうやって人の体に収めるものなのだろう、そんな風にも思えてしまう。

「蠅…でいいのか」

ロリックは話しかける。水と戯れる少女に。

「そうだよ、なんで」

子供のような顔、いや子供なのか。

「その名、呼ぶのに抵抗があるな」

「ならおじさんがつけてよ。交換で僕をもらったでしょ？」
無邪気さ、まだ昇ったばかりの日がその純粹さを強調する。
「考えておく」

レイリを背負うとまた歩き始めた。

もう少し行けば、信頼のおける部下に馬車で待たせてある。
そこにこの少女を連れて行くのか。

他に選択はない。レイリの判断は間違っではない。

このようなものを持ち帰るのは危険だと。

しかし、連れて行かないわけにもいかない。

ロナ・ハルドの要求だ。

少女の言うとおり所有はロリックのものなのだろう、その裏は何
かはわからぬが。

推測するにハルドの思惑はわかる。

ただの興味。

ただ、その興味の威力は恐ろしいものがある。

しかしハルドとて、今の両国のバランスをそう簡単に崩しては己の
身が危ない。

ならばただの興味、いやそれとも

「…ちゃん…おじちゃん！」

さっきから呼ばれていたのか。

そうも自分が思い耽るとは、ロリックの上着を羽織らせた少女が退
屈そうな顔で裾を掴んでいる。

この子供の顔は演技でもないのだろう。

ともかく、何事も無く軍部本省まで持ち越せば、捕縛する事は可能
だ。

ハルドは何も条件はつけていない。
殺すなども。

こちらに こういった存在を教える事が目的か。

馬車が見える。

部下が駆け寄ってくる。

レイリを預け、少女に言う

「お前の名前はハンナだ」

少女は満面の笑み。屈託の無い笑顔。
嬉しいのか。

レイリを乗せたのとは別の馬車に乗り込む。

ハンナを連れて。

優秀な部下は何も聞かず、ただ馬車を走らせた。

見事な隊列。

全ての兵が一点に目標を絞っている。

矢、筒 それぞれの効果を距離でとり完全なる逃げ場を奪つ。

貴族直属大隊に加え元ロリックの率いていた隊、戦時中でもこのような場面は中々みないであろう。

「すみません」

ロリックを馬車でここまで運んできた兵が苦痛の顔で謝罪する。

「構わぬ、レイリ・ミドラは起きているか」

もう一つの馬車の中。意識を取り戻したレイリも外の状態を察する。

「おじちゃん…」

コアシリーズである蠅、ハンナですらもこの状況は恐怖でしかない。

一斉の攻撃を浴びれば終わる。

「どうせ殺さないさ」

レイリが伸びをしながら出てくる。

「そうだな」

ロリックの影に隠れるようにしているハンナ。

セレスが自身の家柄を何かに使用する事はほとんど無い。

王家を支える六貴族。実質の国家責任者でもある。

システィア家

元来その六家の中でも軍事ではなく経済を司る家系。

その資産はレイアニア帝国の5分の1とも言われている。

「レイリ・ミドラ一尉、あなたは今後システィア家にて行動管理させていただきます」

買収、簡単なものだ。

いまやレイアニア帝国にはハンナがいる。

ただっぴろい平野にたった一人を囲み、封じるために配置された軍隊。

その費用をまかなう交換条件。

「セレス…聞きたいことが山ほどある」

「構いません」

レイリにいろいろと聞かれることはわかっていた。

最早隠し切れぬこの状況。

レイリは知っている、ロナ・ハルドの発掘の出資をセレスが行っていたこと。

「こわい…こわい…こわい」

たった一人。

背の低い秋草の中に座り込むハンナ。

日が昇り沈み、それを何度か繰り返す。

食事もなく水もなく二日。

彼女の体内に埋め込まれたコアが生存をさせる為、周囲をみる目はかすんですらくれない。

喉が渴いた

お腹がすいた

10人、20人、30人… どんだけいても負けない。

でもあれは異常に多すぎる。

大国一つの戦力の何割か。

それがすべて彼女にいつでも攻撃できる準備をしたまま静止している。

「これで三日目か…」

ハンナを囲む隊の後ろに設置された高いやぐら。

その上からレイリが見る。

その衣服は新たに、白百合のシスティア家紋章が入るもの。

「そうですね」

セレスも双眼鏡から除く違和感の世界を見て目を背けたい気分になれている。

「ロリックは呼べたのか？」

「明日には」

セレスの今回の行動は他の貴族家からすればよく思われない。

システィア家が莫大な資産を放出している事以外は。

それが多くの行動を自由にさせる。

「どうだ休暇気分は」

ロリック中將は地下牢に幽閉されていた。

ただ待遇は一般のものとは違うが。

「いい部屋じゃねえか」

守衛を下がらせるとレイリが牢の鍵をあけ中に入る。

ガスッ：

ロリックの首を掴み壁にその体を打ち付ける。

「わるいな：そんなに私は気が長いほうではない」

「そんな事しなくても答えてやる」

レイリが手を離す。咽る喉を整えるロリック。

「ただのハルドの要求：といってもお前は納得しないのだろうな」
現にロリックはロナ・ハルドとの密約を疑われ、それでここに閉じ込められているのだ。

「あの状況では密約などなりたたん、それはお前もわかるだろうレイリ」

「私にはおまえがそこまでレイアニアの繁栄を願うタイプには見えなくてな」

レイリの求める答え。

「そのとおりだ、貴族につかわれるのはお前も癪であろう」
「権力か」

六貴族の出身ではないロリックは武功すらあれど、立場はそれに比例しない。

「スレイドをハルドが抱えている以上、レイアニアの今の体制では危険だ」

「おまえをここから出すのはな、セレスでも無理だろう」

レイリの身柄をただ置く、それだけの為にあれだけの隊を用意する資金を払っているのだ。

それにレイリの軍事行動は禁止、その権限はセレスには無い。

それで大隊一つ。

国の中枢からして邪魔な存在ロリックを外に出すため等とほつもない交換条件が必要だろう。

「構いません」

セレスが牢の外に。

「レイリの言うとおり、あなたの指揮能力は高い。それ故に六貴族からはよく思われません」

今もスレイドの宣戦布告の危険性について話し合っていました、そこには一分の隙もあけられないのが現状」

セレスはいつもこうだ。

己を省みず、民衆を考えてしまう甘ったれた思考。なげうつ美德。

「ロリック中将、はじめに言います。あなたは優秀ではありますが生存は望まれません」

「本件を片付け、その後全てを返還し退役、それができますか？」
ご都合主義だ。

きつとそう決まったのだろう。

「はは！それは素晴らしいな！」

レイリが笑う。

彼女自身も使われる側の軍人、精神はそういったものとは相反する。
「そうだろう、そうなるだろうな。戦わせて戦わせて終わればどける」

腹を抱えて笑う。

「なあセレス」

レイリはひとしきり笑うと呟く。

「私の仕事なんだろう？」
冷たい目。

「はい、ロリックは隊をまとめスレイドに侵攻してください。レイリ、あなたは副官としてロリックを…」

蠅編 part・3

ここまでレイリたちが帰還して十日

一度も雨も無く

ハナナはひたすらに耐えるしかない

唇は乾き割れ血の味

動けないが故に不快にからみつく自身の体液と排泄物。

空腹で周囲の草を食べた。

少し離れたところの草を食べようと移動すれば矢が飛んできて足に突き刺さった。

何度も繰り返した。

走り逃げようとしたこともあった。

そうしたらまた、たくさん体に矢が刺さった。

動こうとすれば動こうとするほど本数が増えた。

それでも進んだら片足を火薬で飛ばされてきた何か硬いものが引きちぎった。

でも体は治る。

矢を抜けば塞がる。

足はくつつけたかったが原型はなかった。

動けない

動けない

動けない

自分にたかる虫を齧った。

あまりの味に無い胃の中身を吐いた。

それが土に染み込む前にと地べたに口をつけ啜った。

「あ…あ」

何故だろう 何故だろう どうしてなんだろう

レイアニアについてのこの状況

そんな想像などできるほど成長をしていない彼女。

それを何故か囲み動く攻撃してくるものたち。

「誰か… たすけて」

目の前を蟻が這う。

蠅の死骸を運んでいる。

「だ…だれ…があ… たすけて… あが… たすけてえげええ」

乾き切れた喉から出る声に愛らしさは無い。

「いいだろう」

初めて降り注ぐ日がさえぎられる。

レイリを連れた ロリック。

衰弱しきっていた

若い肌は乾きひび割れ、体のあちこちに赤黒い痣のようなもの。

ハンナの良く知っている感覚

死ぬときの感覚

下の奥は痺れて言葉をうまく出せない

小さな喉からとは思えぬその荒れた年寄りのような呼吸音が
自分の頭の中を反響する

3

10月18日

レイアニアからスレイドへ『鉄器撤廃条約違反 並びに一級犯罪人
ロナ・ハルドの保護』に関する文書を通達

10月27日

スレイドより返信

レイアニア帝国の言い分の根拠の不明慮な点をついたもの

10月30日

レイアニア帝国にスレイドより使者

「そちらの話は濡れ衣だ！」

怒声が響く

「では、証拠を」

長の会議を終わらせるために連れられてきた証拠

片足の少女が抱きかかえられるようにして

ハンナ

「どういう事だ!？」

スレイドの使者は理解不能といったかんじでさらなる怒りを露にする。

「貴方はご存じないかもしれませんが、スレイド…いえスレイドの国家の一部がロナ・ハルドを保護しています」

セレスが声を張り上げる

実現することなどあるとは誰もが思わなかっただろう。

レイアニアとスレイドの共同軍

その一同が両国の境界である城壁に並ぶ

「壮観だな」

レイアニア側の指揮副官のレイリはその状況を見てそう思う。

11月になってもまだ日は照り、昼間は甲冑に身を固める兵達にとつては多少辛いものではある。

ただの搜索

戦闘も無く

11月半ば

少し肌寒い日が続くようになった

セレスは初めて同行するスレイドとの話合いに追われていた
いまだロナ・ハルドは見つからない

ハルドは何を考えている

何故この状況を呼び起こした

ロリックは深く毎日それを繰り返し考える

12月

初めての負傷者が出る

ロナ・ハルドと接触したとの事

「レイリ」

セレスから呼び声がかかる。

実質ハルドと同行しているのはコアシリーズ
レイリでしか太刀打ちは適わない。

接触のあったエリアはすでに包囲してある。

信仰都市エリルアック

古くからの土着信仰の厚いそう大きくない都市

古い教会が立ち並ぶ

「ハンナを同行させろ」

ロリックが口を開く

「なんだと…」

事実、レイリはコアシリーズとしては不完全

故に戦闘になれば勝てる理由が無い

だからといってあのロナ・ハルドと共にいたハンナを投入するなど

「命令だレイリ」

「ふざけるな！あんな餓鬼になにができる！！」

「大丈夫だ」

ハンナはロリックが今は保護している

ただの少女

そんな印象の毎日ほほえましくもある。

ロリックから離れようとはしなかった為致し方なく保護者となった。

ハンナの戦力がレイリを上回るのは事実。

その彼女を引き剥がす時を考えるならば、指揮官としてほとんどの時間をレイアニア軍部本省ですごす

ロリックのもとに置いておいたほうが安全にて確実、そういう判断が下されている。

「やけに仲良しだなロリック… あの餓鬼に欲でも覚えたか！」

「スレイドもそれを望んでいる」

レイリは理解した。

「そういう事が…ならかまわねえ」

部屋を出るとき、セレスと目が合う。

「ごめんなさい」

その声はか細く小さく

向かう馬車

さすがはいまやレイアニア軍部の最大の部隊の副官
作りが違う

レイリは思い出していた

セレスの言葉

「私は責任をとりたい！！貴女の… 全ての…協力していただけ
ませんか」

少し眠ろうと体を傾ける。

セレスは馬鹿だ。

六貴族の家に生まれながら、くだらぬ理想で身をなげうつ
そしていまや財政を大幅に無くしたシスティア家の立場は低くなり
始めている。

無能な小娘

そんなものだ。

政治に関わる器などセレスには無い。

だから今回の栄えある任務に同行を許されたのだろう。

レイリ・ミドラ

セレス・システィア

ロリックとハンナ

そしてセレス

ロナ・ハルド捕縛後に不要な人物達
任務という名の栄えある処刑

大げさな兵達が彼女らを迎える

危険を自らおった勇者達を

表向き

ロナ・ハルド一味を誘導する

無意味な任務

蠅編 part・4

包囲された都市は静かだった。
誰もいない。

相手は少人数だ。

簡単な避難作業だっただろう。

これは処刑なのだから。

蠅編終章

ハンナは義足である事をかんじさせるように片足を引きずって歩く。
肉体の衰弱すら戻ったものの、精神はそうではないのだろう。

虚ろな目でただ一緒に歩く。

無人の街の不気味さ。

戦時中にはよく見た光景だ。

ただ、建物に破壊のあと無く、その時と比べても異様な雰囲気。

「みなさん…すみません」

セレスが言う。

何度目だろう

「いいかげんにしろ！」

レイリが怒鳴る。

「かわらねえんだ、生まれてきたことを呪うさ」

エリルアツクの街に入るときに指定された、古い教会群のなかでも
ひととき目立つ高い塔。

「わたしが、ハルドと交渉すれば…」

可能ならハルドを生け捕りにする。それがレイアニアとスレイドに

とつては最良の道。

そんな事は不可能。

一筋の希望ですらない。

建前だ。

レイリが所属していたあの第十六機制隊の兵達が皆死んだのとおなじ建前。

不要なものなど無い。

死ぬことに意味をもつ首もある。

レイリ達がいてもいなくとも、レイアニアとスレイドの連合軍はこの街ごと焼き払うだろう。

「しかしなあ、むかつく。むかつくな」

レイリがぼやく。

「有罪にして死刑でいいじゃねえか、面倒なそんざいだなお偉いさんは」

剣を抜く。ハンナに壊され新調した剣はまだ未使用。

「セレス！」

「あ はい！」

驚いてセレスがレイリを見る。

綺麗な瞳。曇りも、諦めも無い。

「生き残る方法を考えようじゃないか」

レイリの発言に場が少し明るくなる。

例えそれが不可能だとしても。

「くくく……」

この完全なる軍に囲まれてなお、ロナ・ハルドは動揺する事はなか

った。

「マリア、客だ」

身を置く塔の入り口に人影が見える。
高い位置の部屋からそれを見下ろす。

「レイリ、死ぬ前にもう一度みてやろう」

マリアが剣を構える。両手の双剣がスラリとした体軀を引き立てる。

「どうせハルドは何かたくらんでいるんだろ？」

レイリが気丈に返す。

「蠅か：他の二人はどうした？」

レイリとハンナ、塔に入ったのは二人だ。

ハンナの死んだような目を見るマリア

「レイアニアらしいやり方だな…」

マリアが呟くと同時にレイリの攻撃

速い

マリアは剣をクロスさせ、それを受ける。

軽い…

「レイリ貴様！」

剣撃では無い、レイリはただ剣を投げつけただけ。

その間ほんの一瞬

次の攻撃がマリアに飛ぶ

ぐしゅっ！！！！

嫌な音が響く

双剣の餌食となったのはレイリでは無い。

マリアと一緒にいた頃は、蠅という名前だった少女ハンナ。
吐き出された血がマリアの視界を奪う。

十字に裂かれた傷口を塞ごうとハンナの体内から蠢く触手が見えた。
レイリがハンナの背を強く蹴る。

「あが……!!」

マリアの声かハンナの声なのか。

そんな事はどうでもいい。

さっき投げた剣を拾う。

ド……!!

石の床に突きささる剣。

ハンナごとマリアを串刺しにして。

「レイリ……が……!!」

密着した体

ハンナから飛び出した触手はマリアにも突き刺さる。

触手は二人の体をどんどんと近づける

バキン……バキン……!!

ハンナの肋骨が外側にめくれる音

「レイリ……がああああああ」

苦痛　生きているかわからないハンナは離れず、マリアの体中に潜り込ませてくる。
這いずり回られるような触手の威力に反発して四肢の自由が利かない。

レイリは駆け上がっていた。

マリアに止めを刺す間も惜しんでロナ・ハルドのいるであろう上に、長い螺旋階段。

「あはは！レイリ賢いね！！！」

階段の踊り場　ブルーグレーの長い髪が塔の装飾の隙間からの光に輝く　アリス。

レイリが後ろに飛ぶ

同時に投げられたのはレイリの革製の少しサイズのある鞆。

ゴ！！！！！！！！

火薬

階段が崩れる。

砂埃があがり視界を奪う。

「このクソ虫がああああああ！！！」

先ほどの愛らしささえ感じる雰囲気から一変したアリスの怒声が下に落ちていく。

「はあっ…はあっ…」

レイリの体は、鉤爪を先につけた縄でなんとか空中に浮いている。それを手繰り寄せ体を上げる。

「あらレイリ、さすがだね」

黒い衣装 黒い髪 漆黒の目
「ハルド……!!」

ガゴ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!

とんでも無い音が鳴り響く

高い塔の中で反響するのが終わらないうちにまた同じ音

「良いタイミングね 綺麗だわ」

塔にうちこまれていく無数の大砲の弾。

古い石壁は耐えれず崩落していく。

「関係ねえ!」

連合軍が痺れを切らしたのだろう。予定通りの処刑をはじめただけだ。

ハルドの足がレイリに蹴飛ばされあらぬ方向に曲がる。

「セレスに感謝しなさいレイリ、どうせ私の戦力が人と同じなのを教わったのでしょうか?」

不敵な笑み。

ゴス!!

馬乗りになり顔を殴る

奥歯が転がる

ガガガ……

砲撃が続く、塔が傾き始める。

「生き残る方法を教えろ」

もう一度殴る。

「ぶっ… もちろんあるわレイリ… んぐー!!」
また殴る。

「はやくしろ」

ハルドの顔は変形し見る形も無い。

これほどの火薬と鉄が使用されたことは歴史上あまり見ないことだろう。

塔は冬の寒空を仰げるほどに疲弊している。

「……!!!」

見える外の景色

ハルドの答

レイアニア帝国の旗

戦争の景色

あの砲撃はスレイドが行っていたのか。

その音はもう無い。

後方、レイアニア帝国の砲撃

その目標はスレイドの軍。

「ハルド… てめえ」

言い終わる前にレイリはこめかみに衝撃を受けはじき飛ぶ。

塔の床に叩きつけられる体

「おまえが落ちるのが本当だよ」

ロナ・ハルドに肩を貸すのはアリス。

「あ……」

体が動かない。

モロに受けすぎた。

「レイリ……ごめんなさい……」

セレスの声

その横の男

「てめ……」

ロリック

レイリの視界に、一瞬何かが飛んでくるのが見えた。
もの凄い音がした。

蠅編 } p a r t . 4 } (後書き)

ここまでご愛読ありがとうございました。
次回から新章に入ります。

罰體編く part・0く

あれから約半年

また夏の季節がやってくる

セレス・システィアは悔いていた

悔いて

悔いて

悔いて

自室を出る事も無く

窓枠の蜘蛛をぼんやり見つめる

悔いて

悔いて

偽善なのだ所詮

偽善でしかない貴族の言い分

己の欲のために民衆を犠牲にしてきた者たちよりも

自分のほうが性質が悪い

そうだ

そうなんだ

私は無力

スレイドは最早灯火すら消えかけた燃えかす。

無能な貴族共は処刑した。

ロナ・ハルドの助力

鉄器兵の復活

そしてスレイド内部からの予定されていた反乱。
すべては上手くいき

ロリックは国王の座を手に入れた。

これからの日の為に、優秀な鉄器兵は身を隠させておいた。
レイアニアのはるか南
未開の地に彼らを逃がしておいた。

ロナ・ハルドのトリックはいともくだらぬものだった。
単純な個人的な脅し。

スレイドの有力者を一人に、少女を一人あてがっただけ。
毎日、離れることもなく、ただただその少女で命を脅かしただけ。
その少女はハンナでは無い。

蠅の名をもつ少女、ハンナはそう教え込まれただけ。
戦災孤児をひろい、混乱した記憶に思い込ませただけ。
ロナ・ハルドはまだ隠している。

いったい世に何人のコアシリーズを置いているのか。

「ロリックはさすがだな」

見事な制圧ぶりにハルドの酒もすすむ。

「マリア、どうだレイアニアに戻った気分は」

銀の器に追加で注がれるぶどう酒。

「少々退屈です」

安全が保障された今。

「蠅、おまえはどうだ」

「あ…あう」

痴呆のようになったハンナがそこに。
ハルドは上機嫌に注がれた酒を味わう。

制圧戦の一番難しいところは序盤では無い。

一定ラインまでの戦力差をみせつければ投降させるのはたやすい。

スレイドはいまだ存在すれどそれは最早レイアニアの属国。

民衆の心理を考えた上で、形式的に残された抜け殻。

問題は、抵抗しゲリラ化した者ども。

鉄器撤廃条約の時と同じ。

スレイドの僻地はそういったゲリラ戦が激化していた。

その中の一つ。

髑髏の章を掲げている彼ら。

率いているのは、元々スレイドの貴族部隊を実質任されていたといわれる者。

優秀な指揮官なのであろう。

攻めては引き、身を隠す。地の利を生かし少数でも的確な戦果を出す。

武具を精製する為の鉱山を陣とし譲らない。

統率がとくとれた彼らはレイアニア兵ですら恐れる。

本隊を送るにはまだ情勢は不安定すぎる。

しかし、資源を考えるとその地を奪い返さぬわけには行かぬ。

そんな国の思考を読み抵抗し続けるまでの手腕の持ち主は、意外にも女性だった。

メイヘル・アクスナ

かつてのスレイドの純血主義をしめすような、黄金色の髪に碧眼の凛々しい彼女は、

作戦行動の結果の報告に来たものを自室に迎える。

返り血をあびたままの甲冑を乱暴に脱ぎ捨てる報告者。

「メイヘル、47名だ。殺さずに抑えたのは」

近隣の他ゲリラの吸収。

自分達の戦力を増やす為の一つの手段。

時として血なまぐさい場面になる。

それを司る、メイヘル直下の突撃部隊、その隊長。

「ご苦労だったな」

一番危険性のある任務をこなした部下に、水を差し出すメイヘル
それを受け取るのは、右目に眼帯をしたメイヘルよりも若い女性兵士。

レイリ・ミドラ

一息をつくように、あの時よりも少し伸びた髪を　まとめてある紐をほどく。

闘體編 part・1

「次!!」

レイリ・ミドラが、派手に曲がってしまった剣を投げ捨てながら叫ぶ。

すぐさま待機していた兵により、新しい剣が抜き身のまま投げられる。

ガス!!!!!!!!!!

それを空中で掴むやいなや レイアニア帝国の鉄器兵を両断する。

ド...

倒れる敵を踏み台にして、仲間達が鉄器兵と交戦している中央に着地する。

「どいてろ...」

大振りな攻撃で一撃で一人づつ、破壊していく。

ガイッ!

五人ほど斬ったあとだろう、切れ味を落とした剣は、鉄と融合した胴体の中腹で止まる。

「ちっ...」

そのまま持ち上げ叩き付ける。

剣はへし折れ切っ先が跳ねる。

叩きつけられた体は見る影も無く、上半身と下半身を分断され転が

っている。

「がふ……」

死角の右目側、そちらを見ないまま、折れた剣の持ち手のほうを投げる。

それは、木の陰から狙っていた矢手の顔に突き刺さる。

1

「あは！」

ゴス！

「痛い？ねえ どうしてなにも答えないのかな？」

ゴス！

硬い石の床

殴られるたびに少女の頭があたって嫌な音がする。

「強くいくよ？」

ゴキユ！！！！

少女の首があらぬ方向にまがる。

馬乗りになりこの暴力を振るうのはアリス。

そして殴られ続けている少女は 蠅。

「あ……あう う……」

無理やりな方向から蠅の首が戻ろつとギチギチと音を立てる。

コアによる修復能力。

石の床の血痕

何度これを繰り返したのか。

「くそがき」

アリスがぼそりと言う。

バキ!!

「あああああああああああああ」

「それでいいのそれで」

絶叫に嬉しそうにするアリスの手の中、引きちぎった蠅の手首。

「ぐうああ あぐうううあううう」

身動きの取れないまま、苦痛の声は出続ける。

「もうーついこ?」

「あぎやああがああぐあああああああ」

反対の手首も捻り切り、後ろに ぽい と投げ捨てる。

「あと少しね」

その手首が足元に転がってきたのを見てハルドは不気味に笑う。

「セレス様、お食事です」

マリアがセレスの部屋に暖かいスープだけを持ってくる。

「…いないわ」

かなり衰弱した彼女、いくつも年をとってしまったようにすら見える。

「そろそろ食べていただかないと…」

痛々しい。

ロナ・ハルドの発掘に資金を出していたシステイア家
古代文明の保護という、ただそれだけの為だったはず。

それでこのような現実、セレスはその責任を負おうとした。

「死ぬべきだったのよあの時私は」

また同じだ。

セレスがレイアニアに戻されてからずっと、この話は繰り返し
繰り返し。 繰

「そんな事はありません、死してよい事など」

「レイリは死んだわ」

レイリ・ミドラの生存については、セレスに伝えてない。

ハルドが生かせと言ったから。

それにいまや敵のゲリラに数えられていることなど 言えるはずも
無い。

「マリア…あなたも憎んでいるのでしょうか？」

目の光は無い。

どんな苦難な状況でも、立場をわきまえ、まず自身を犠牲にしてき
たセレスのあの目。

マリアは思い出す。

死ぬはずだった自分とアリス。

それに無条件に救ってくれた彼女を。

「セレス様私は…」

「わたしは貴女を救う顔をして化け物にした！アリスも！！！！レ
イリも！！！！」

「セレス様!!」

抱きしめる。これもいつもの事。

「セレス様は私たちに生存の道を作ってくれただけです…」

それに、コアシリーズにしたのは実際はハルドじゃないですか」

ハルドが体内にもつもの　それが人にコアを埋め込む鍵。

「そうね…　ハルドがそうしたもの　私には”マザーコア”は無い…」

マリアは少し、ほっとする。

このような心の落ち着け方しかできない悔しさ。

「そうね　マリア　スープをいただけるかしら」

三日ぶりか。ようやく口にくしてくれる。

小さな安心感が、マリアの心に生まれる。

トマトをベースにしたスープ。

その薄い赤の水面にセレスの顔が映りこむ。

「私は無能!!!!マザーコアすらもない!!!!全て無い　何も無い　何も無い　何も無い!!!!!!」

少し冷ましておいたスープの器がマリアに当たる。
服に染み込む、スープ。

「出てって…　もう惨め…　もう嫌…もう嫌」

マリアは静かに部屋を出る。

ガッ

出てすぐの壁を殴る。

むろん加減しての事。

コアシリーズであるマリアが殴れば、普通にこれくらいの部屋壁は抜ける。

だから加減して殴る。

苦痛に悶える兵達。

切断された場所を焼けた鉄で止血する音、声。
肉の焼ける嫌な匂いがレイリの鼻を刺激する。

レイリの所属する髑髏章の名も無きゲリラ。

彼らに投入される部隊の数は日に日に増え、苦戦を強いられる。

「レイリ、少し見てもらいたいものがある」

メイヘルと呼ばれ移動する。

「鉄器専用剣か」

レイアニア帝国にいたとき、レイリ自身も使っていたあの剣。
鉄と同じ方法で作られたもの。

「やつらが持っていたものだ、レイリ使え」

メイヘルはそれを渡す。

現に通常の剣ではレイリの放つ攻撃の威力にはそう長くもたない。

「それとも一つ」

メイヘルが机の上に置いたもの。

注射器の中身は、緑色のくすんだ様な溶液で満たされている。

「コアの中身らしいな。それを使った兵達も来ている」

レイリも対峙しているからよくわかる。

それを使用した者達は一時的に、コアシリーズであるレイリすら容易には倒せない。

「私は少しここを離れる、よい手土産だ」

メイヘルが立ち上がる。

「どこいくんだよ」

「アテリア小佐だ」

現スレイドの実力者、過去にも秘密裏に　メイヘルの率いるゲリラ支援をしてきた男。

アテリア少佐の力添えが無ければ、ここまでもたなかつただろう。ゲリラに属する者でもほんの一部しか知らないこと。

レイリも一度会った事がある。

元レイアニアである事にも関わらず、メイヘルが信頼の上連れて行ったのだ。

「わかった、それまで私が守るよ」

今手に入れたばかりの剣を握り締める。

さすがに息が上がる。

一般兵には無理な相手がここまでいては。

血まみれになるほど浴びながら、レイリは呼吸を整える。

あの溶液を注射した者達、そして鉄器。

こいつらを倒せば有益な、拾得物が手に入る。

専用剣に溶液だ。

レイリの部下にも鉄器はある。

無論、溶液も　使用しないでおけるような状況ではない。

「あ…あ」

また一人の兵が、溶液の効果が切れだらりと天を仰ぐ。

「ちっ…」

レイリ間にあわず、そのまま敵の剣の餌食となる。

アリスの暴力は毎日続いた。
再生するが故の終わらない毎日。
四肢を失い 転がる体。

「返してあげる」

アリスは元々 蠅のものであつた足を持ち腹部に叩き込む

「あぐあああああああ」

体内から露出した触手は、その脚を吸収するように絡めていく。

「きもちわるい」

軽く蹴飛ばされ転がされる蠅。

「ころころころころ」

しばらく転がして遊ぶ、粘液が床に付着して剥がれる音
腹からありえない方向で突き出す足。

「ねえ、レイリとロリックおぼえてる？」

アリスが顔を近づけ囁く。
下卑た笑い、見下す視線。

「あ… お おじちゃん」

蠅が人の言葉を話したのはどれくらいだろう。
あの時は、ロリックをおじちゃんと呼んでいた。
アリスが喜びに満ちる。

「そう おじちゃん クスクス… あんたはハンナだっけ？」

暴力にすら飽きたアリスを楽しませる為だけの質問が投げかけられ

る。

「ハンナ… ハンナ… あがあああああああああああ
あああ」

「く…この…!! 糞蠅…!!…!!…!!」
噛み付いた。

蠅が四肢の無い体を跳ね上がらせアリスの首筋に。
白い肌がちぎれ赤を露出させる。

「このゴミ…クソが…」

アリスはその白い首筋を抑え、憎しみの顔を向ける。

「があああああああああ … 蠅じゃない 蠅じゃなあああ
ああ」

突き飛ばされた蠅は壁にあたりそのまま叫び続ける。

アリスは殺意に溢れ、完全なる死をもたらそうと近づく。

「待て」

剣を片手に、一瞬で捌かれ絶命する蠅。

アリスを制止し、前に出てそれを行ったのはマリア。

体から離される様に飛ばされたコア。

床では主を失ったコアが触手をのた打ち回らせる。

「なんだよマリア…」
怒り収まらぬアリス。

「好きにしる」

剣を収め触手をしまい静かになったコアを拾う。

「クソ…クソ…」

マリアがコアを持ち帰った後、アリスは原型の無いハンナだった肉片を、ぐちゃぐちゃと踏みつけた。

罰體編く part・3く

「レイリ・ミドラを殺すか…ハルド！」

マリアが珍しく感情的な表情を見せる。

「殺さないわ」

「しかし…不完全なレイリ・ミドラでは完全なコアシリーズに勝てない。話が違うぞ！」

「大丈夫よ」

動じず酒を呑むのを続けるハルド。

「セレス様を救うのが私との約束だろう！！」

マリアがその盃を取り上げる。

「わかってるわ。レイリ・ミドラは殺されないわ…レイリの友人を向かわせるのだから」

飄々と答えるだけ。

「説明しろ…」

「貴女に私への強制力はないわ」

違う器に酒を注ぐ。

「わかつている、完全なコアシリーズはハルドには攻撃できない…」

「そうね、私は母だから、あなたたちはできない。レイリ・ミドラは不完全だから可能…今更でしょう？」

「私ではなくとも、今やレイアニアとスレイドが殺そうとしている…その護衛をやめてもいいのか！」

マリアが大声を上げる。

「ふふ…マリア…どうしたの？今なんて言ったのかしら…ふふ…はは…！」

ハルドが突如笑い出す。

「冷静になりなさい。私を護衛？そんなものはいらぬのが今の情勢よ？」

4

「レイリ！！投降しろ！！私は完全なコアシリーズだ！！！」
レイリの属するゲリラの同胞を切り捨て、背の高い女が叫ぶ。

「ちつ…なんでてめえがいるんだよ　ロレア」

第十八機制隊も同じくした同僚ロレア。レイリの目線の先に彼女が仁王立ちする。

「レイリ、投降しないのなら　斬るぞ」

「やってみろ…」
憶する事もない。

「わかったマリア？…ふふ　わかっているわよね」
黙って聞くしかない。

何故ハルドが殺されないか。

ハルドの言うとおり、コアシリーズは通常マザーコアを持つもの
ハルドを攻撃はできない。

それが刻まれた古代の記憶だという。

「コアは記憶する…それが面白いところ。生きている人間の意志には埋もれてしまうごく微かな記憶」

ハルドは上機嫌だ。

「戦力を持たぬマザーコア…それが一番重要なもの、それならばそれに対し保険をかけるのが当然」

ハルド曰く

コアは記憶をしていくもの。

宿主の行動、意思を覚え それを伝えるもの。

それ故に、マリアも体感するとおり コアの所持者はハルドを攻撃できない。

ハルドを第三者が殺してそれを奪えば済む。

それだけの話。

しかし、この気まぐれな天才は仕掛けをした。

「誰も私になりたくないのよ。今は殺されるときではないわ」

国と国

権力者と権力者

手の届く範囲に自分を置き

自分の立場になる危険を見せ付ける。

それだけだ。

今の情勢になれば、『誰かがハルドを殺してハルドになればまた殺される』

それゆえの軟禁。

現にハルドは自室から出ていない。

全て監視下にある。

「それでマリア…どうしてレイリが殺されると思ったの？」

ハルドに攻撃できる唯一の不完全なコアシリーズ。

それ故に弱いレイリ。

「まさか…」

「そう。誰がレイリのコアが記憶までしていかないと言った？時間

かかるだけよ」

「く…」

ロレアは意外な結果を見せられている。

レイリは不完全だ、だから今の完全な私なら勝てる。余裕すら持つて。

ガツ!!

無い右目側から叩き込んだはずの剣を受けられる。

衝撃からこちらの力のほうが勝っているのは確かだ。

でもなんだ。

見てない攻撃を確実に受流す体捌き…

「ロレア…おまえ 舐めてるだろう?」

レイリの蹴りが腹を捉える。

「コア入れたからってなあ!! 戦闘は力だけじゃねえんだ!!! さぼってたんだろどうせ!!」

隙を作ってしまった。

峰打ち。

顎にそれを受け派手に飛ぶ。

景色が一瞬消える。

「ロレア…おまえ軍人だろうが」

レイリの情け。

レイリ・ミドラのコアはコアシリーズとしての戦闘の記憶を積んでいく

ハルドの言う話どおりならば
計画された 異常なまでの戦闘に身を置いてきたのだろう。

「それでマリア：レイリにあなたは殺されるでしょうね」
ハルドのつきつけた事実はきつと事実だ。

「大丈夫、あなたは殺されても必要だから蘇らせてあげる」

私のコアを、誰かにいれるというのか。

生きている人間に対し、死して意思で抗いその体を奪えというのか。

マリアですらぞつとする死を越えた話。

「心配要らないわ、あなたの時は殺したての死体を使うわ」
おぞましい。

意思の無くなった体に意思をいれるというその言葉を、唯のハルド
は日常事のように言う。

「そろそろじゃないかしら？アリスががんばった成果：気になるわ
ね」

窓の外は日が落ちかけている。

「こわいよ……」

「あ？」

何発か殴った。

戦意を喪失しかけたロレアに たたみかけるように。
ふいに耳をついた言葉。

「こわい… なんで……」

衝撃

首筋に走る痛み

「つつ…」

肉ごともっていかれたか…

口の中のものを吐き捨て　ロレアが獣のような姿勢でこちらを見ている。

無意識に身を引いたのか。

「ロレア…どうした　　！！」

でたらめだ。

あんな形の攻撃

まるで餓鬼の喧嘩のような。

レイリが剣でうけても打ち込んできた拳は裂け、触手で再生されていくのが足元で見える。

「足…」

レイリが自分が突き飛ばされ　仰向けに倒れていた事を自覚する。
同時に避けた攻撃が地を抉る。

「どうして…　おじちゃ…」

「蠅……」

ロレアでは無い。あの表情

蠅の名を持つ少女…ハンナのように。

ここまで経験のない相手であれば馴れればさばける。
かわしながら、両腕を切り落とした。

「はっ…はっ… どういう事だ」

「あああああああああああああああぐあがあああああや
だいやだ！！」

ロレアだ。

目の前にいるのはロレアだ。

両腕を無くし狂乱の顔でまだこちらに向かってくるのは…

「くそっ…」

一閃。

目をつぶって振りぬいた。

起動を予測する事でも無い。

あんな無様な突進。

それを斬り伏せたのだ。

返り血が教えてくれる。

敵は確実に絶命した。

「ロレア…」

ほんの少しの再開。

ほんの少しの会話。

「…死ぬよりマシだと…」

レイリが目を開ける。

レイアニアの兵達。

肩に矢を打たれる。

「どうして 私は こんな時でも……」
ずるりと矢を引き抜く。

「どうして」

動かぬレイリを狙う矢がまた刺さる。

「どうして 私は」

引き抜いて捨てる。

弓をひく ぎしぎしとした音が聞こえる。

火薬はもう尽きたか。

相手は何人だ。

撤退もせず、残り私を仕留めようとする優秀な軍人は何人だ。

「いいだろう… 生き残ってやるさ」

真二つになったロレアを越える。

「生き残ればいいんだろう… 全員殺せば終わる………!!」

走る。

「逃げるな!!」

追いついた。

弓兵を一人斬る。

「逃げるな……!! 戦え………!!」

もう一人。

レイリの前では普通の人間も鉄器も足が遅い。

「誰か殺しにこい………!!」

斬る物がなくなった剣を強く岩に叩きつける。

「セレス様あ」

アリスが甘えた声で入室する。

それを気がついていないのか、部屋の中空をセレスは見つめたまま。

「レイリ？」

近づいたアリスの名をそう呼ぶセレス。

「……！！！」

見えていないのか。

アリスは絶望的な表情。

セレスが自分を認識してくれていない。

どうしたらいいのかわからなくなる。

「外に出てろ」

マリアがいつのまにか来ていてアリスを外に出す。

「クソ…虫」

アリスの不快。

「クソ虫レイリ……」

部屋の前の守衛の頭を握りつぶしながら 俯いたまま…

「大丈夫かレイリ」

レイリとロレアの戦闘から二週間。

メイヘルが陣営に戻り、すぐかけつけたのはレイリの所。

「問題ない」

レイリの戦力は確かにこのゲリラの中で比べれるものなど無い。

一人で、真っ赤に染まった体。

レイリ自身に傷は無い。

周囲を埋め尽くすレイアニアの兵の死体。

「メイヘル… コアを献上してこい」

革袋から、ロレアから取り出したコアを投げる。

「あの糞貴族でも、これを渡せばもっと協力するだろう」

レイリの言うとおりで。

秘密裏な支援の理由は、今やスレイドがレイアニアの属国であるからに他ならない。

レイリが不完全でコアシリーズには勝てない。

それを消し去る理由。

勝利の兆しがあれば、アテリア小佐の支援もより受けやすい。

「いけ 早くな」

レイリが顔を上げる。

静かな笑顔。

「すまない」

メイヘルは急ぎ戻る。

「そうかレイリはそこまで強くなっていたか」

ハルドが嬉しそうに言う。

「髑髏隊の殲滅戦を行う。コアシリーズを出せ」

ロリック。

二人の会話は言葉数少なく進む。

マリアとアリスがハルドの背後に立つ。

少し無言のときが続いた後、ハルドは言う。

「アリス レイリを殺して来い」

ニヤリとアリスが笑う。

追憶編 それぞれの過去 その1／マリアとアリスとセレスと

一人のブルージェーの髪の女性は意識がない。

それを守るように、黒髪を少し短く切り揃えた女。

それを取り囲む、服装は軍人だがあまりにも荒っぽい連中。

一人の鉄器兵を中心に、下卑た笑いを浮かべ獲物を見る。

彼女達は逃げ遅れたのか。

燃え、家屋の崩れた戦闘の跡地。

「私らをどうする気だ」

銀髪の女は流血し、息があるのかどうかも定かではない。

男達はその女達に覆いかぶさるように乗る。

細い腕

抵抗する力はあまりにも弱い。

彼女達の、破かれた露出の多い服装。

売春婦だろう事は一見してわかる。

「やめなさい。レイアニア軍規ではそのような行動は禁止されているはず。」

汗ばんだ男の肉体の向こう、そう声が聞こえた。

男達はこの余興を邪魔する存在にすぐさま戦闘意識を向ける。

声の主は、背の低い華奢な少女。

「私達は、暴漢じゃないわ」

男達は、”同じ国家の軍服に身を包んだ”少女を取り囲む。

レイアニアとスレイド間の戦争。

レイアニア帝国側の鉄器兵の出現で、終結に向かいはじめた戦局。

長い膠着状態が終わり

一国に有利に変わった環境は、暴徒を生み

規律さえない無法の地を、弱者側の随所に生み出す。

襲われていた女はこのあまりにも”脆弱に見える救い”に希望すら持てない。

しかし、男たちはすぐに開放する。

少女の持つ紋章その効力。

単純な話、上官命令だ。

「ごめんなさい。」

兵達を簡単に退散させた少女は、”セレス”と名乗った。

「…」

返す言葉はない。

「その子、もう命がもたない…」

そう言った救助者に、助けられたはずの女の感情が爆発する。

「あんたら…あんたら軍人が…！！！！！」

その感情をぶつけられ、地面に押し倒されるセレス。

「あなた、名前は？」

背を地面に打ちつけられたまま聞く。

「名前なんて私にはない…店では、マリアって名前だ。」

掴む手が緩む。

「そうその子は？」

死にゆく銀髪の娘。

「こいつはアリス…」

完全に手を離すマリアと名乗った女。

セレスは起き上がってゆつくりと、優しく話し出す。

「もう大丈夫だよぉ〜！！！」

元気良く、アリスが走り回る。

妖艶な見た目からは想像できない子供っぽい仕草で。

軍部本局の中庭。丁寧に整えられた背の低い木。

「これがあんたの言っていた」

マリアは感心したように言う。

「そう、ごめんね」

セレスは悲しそうな顔で 走り回るアリスを見ている。

「なんで謝るんだ？」

不思議そうに聞く。

「だって、もうあの子は……」

セレスの死ぬはずだった、アリスを復活させた方法。

「どうせ私らは名前もないような身分だ」

煙草を啜えて、もう一本をセレスにすすめる。

二人でマツチの火を分け合うようにして。

今日は日差しが少し強い。

少し小高い位置のこの庭から少し先、今まさに出撃せんとしている兵達が見える。

皆、体に鉄を加えた鉄器の兵。

それをぼんやりマリアは眺める。

「あいつら全部、触れさせただけのやつか」

「そうだね。埋め込むのは、数に限りもあるし」

セレスが少し寂しそうに見えた。

「私も、お願いできるかな。あのマザーなんとか使えば、埋め込めるんだろ？」

「マザーコアね」

そついうと少し笑った。

「見て！」

人にしては高く、そして身軽に跳躍してみせるアリス

「あいつだけじゃ、あんたも苦労するだろう」

そつ言うともマリアが立ち上がる。

数カ月後、ハルドを中心とした鉄器開発部隊がレイアニアから逃亡する事件がおきる。

同時に最重要厳重保管物”マザーコア”の消失。

「セレス様……」

その報せを受けたセレス。

落胆する彼女に、マリアが声をかける。

「セレス、これからは別配属になってもらう。

貴官も本来なら、同罪の容疑をかけるところだが、特別措置だ。この状況だからな」

その命を出すのはロリック。

「貴様……！」

マリア、アリスが盾になるが、それを優しく止めるセレス。

「ありがとうロリック中将」

「二人にはしばらく謹慎してもらう。セレス、コアシリーズと鉄器兵を一名づつつける。猶予は無いどうする？」

淡々と聞く。

「中将、私たちではいけないのですか？」

駄目だとわかり切った質問をするマリア。

「あたり前だ。貴様らは元々軍部登録者ではない。この任務は任せられない」

あたり前の理由である事なんてわかってる。

それでもわきあがる感情を　黙って唇を噛み、押し殺す二人。

「まってて…必ず帰ってくるよ」

セレスはロリックに一礼するとその場を発つ。

「セレス様あ！！」

セレスが部屋を出るとアリスが泣きじゃくる。

マリアはアリスを抱きかかえるように、追いかけていかないように必死に抑える。

ここで自分達が暴れてしまっではもっと危険な立場にセレスを置く事になる。

その理解ができてしまう自分を狂おしく思う部分もある。

「マリア話がある」

ロリックの申し出。

受けるしかない筋書き。

数日後、マリアとアリス両名は、逃亡者として軍部登録に記載される。

元々、セレス直属の特別雇用の立場の二人の逃亡は

ハルドの時とは違い、知る者は軍部上層部だけのご少数だけだった。

追憶編 それぞれの過去 その2 / 266部隊隊長レイリ・ミドラ

「優秀だな」

書面にされた経歴を見ながらロナ・ハルドはそう呟いた。
山積みになれた 兵たちの個人データ。

細かな情報が書かれたその中から一つを取り上げる。

12歳で入隊

現在16歳になるまでの戦果 ことさら近接戦に置いては負けなし。
探していた条件に限りなく近い

「ハルド…少し休んだらどうですか…」

セレスが心配そうに紅茶を差し出す。

日夜関係なしに、この作業を続けているハルド。

「セレス、実際私みたいな卑しい身分の人間は休むわけにはいかな
いの」

ハルドがまだ熱い紅茶を受け取る。

眠気覚ましも兼ね、濃く熱く淹れた紅茶。

「そんな…」

実際セレスの口利き、それに加え『コアの発掘 そしてその研究』
を行う為

軍部所属となれたのは奇跡に近いもの。

「それに見つけたわ、実際会いたい の お願いできるかしら？」

「レイリ・ミドラ…」

その書類の記載された名前。

「わかった」

いとも簡単にレイリは受け入れた。
セレスは正直驚いている。
今の話だけで理解したのか　と。

「よくわかんないけどさ、私の立場じゃ断る理由は無いだろっ？」
そういう性格なのか。
とりあえずハルドのもとに連れて行く。

「まっていたわレイリ・ミドラ」
レイリが戦線より戻るまで17日。

最前線での任務から緊急で戻されたのだ。

「この国の守護となるのよ　あなたは」

ハルドが嬉しそうにいう。

「よろしくお願いします」

セレスが頭を深く下げる。

貴族のこの少女が自分に頭を下げる　その状況はどれくらいの事なのか　とレイリは思う。

「で？何をすればいいんだ」

レイリが聞く。

「ふふ…はは…」

思わず笑ってしまうハルド、それに不快な表情を隠せないレイリ。

「鉄器は知っているわね？」

レイリはうなずく。

味方とはいえ急に投入された異形の兵。

「鉄器になれと？」

「違うわ、マリア」

呼ばれて出てくる。

「この子は三ヶ月前までは売春婦、手合わせしてもらえるかしら？」

「舐められたものだな」

レイリの苛立ちは限界が近い。

「が…」

見えない…攻撃が。

体さばきは素人だ、なんだこの威力と速さは。

「わかった？これが新しい力。レイリあなたにはそれになってもら
うわ」

ハルドの話。

コアシリーズ

秘密兵器

それがレイリに適正だという。

女のほうが、融合度が高く、より強い。

「若い方がいいの。貴方は若さも戦争の経験も高い」

レイリに用意された部屋は身分に似合わぬ豪華なもの。

軍服以外に袖を通した記憶すら思い出せぬくらい久方ぶりの一日。

「レイリ、本当にいいのですか？」

セレスが聞く。

「何が？」

「え…何がつて」

戸惑い。

「私はこれ以外に生きる方法は知らん、そして命令だろこれは？」
セレスが申し訳なさそうな顔でレイリを見つめている。

「ああ！なんつーかな。貴族さん、私は望んでる。誰より強くなれるのであればそれは軍人にとって
死なないって事だから その」

「うふふ…」

「なんだよ？」
思わず笑ってしまった。

昨日のハルドも笑ってしまっくらい単純なレイリの発想。

「ごめんなさい いや 私も失礼しました、よろしく願います
レイリ」

やりづらそうな顔で頭を掻くレイリ。

「それですね、レイリ。私の名前はセレスです 貴族さんではあり
ませんよ？」

穏やかな春の半ばの話。

正直、少し後悔した。
体内を弄られる不快感。
何かが這い回る。

「う… あ あっ」

「生娘みたいな声ね」

腹が立つ 腹が立つ 腹が立つ。

そんな事を言われては 面子に関わる。

「うぁぁぁぁー!!」

声が出てしまう。

仰け反らした体。立ってられない。

「素晴らしい記憶だわ。殺して殺して殺してきたのね ずっと」
ハルドが恍惚の表情で言う。

ハルドの腹部から 無数の触手がレイリを絡めるようにして掴んでいる…

ぬめるそれは、レイリの体に潜り込み引つ掻き回すように暴れる。

痛みは無い

それがさらに苦を煽る。

気が狂いそうだ…何かを吸い上げられている気もする。

「よく耐えたわね」

じゅる! じゅる!!

レイリの体から触手が次々に離れていく。

不思議と塞がっていくその挿っていたはずの穴。

「あ…あ　あああああああう！！」

突如の激痛

背中を何かがへし折ったような

「うがあああああああああ」

「クス…　レイリあなたが一番大切なの」
その声はレイリの耳には聞こえない。

266部隊

独自行動をとり、他の隊と行動を一緒にとる事は無い
その部隊の結束は家族以上に固い。

総勢14名

すくない彼らを率いるのは　　齢17歳になったばかりの少女。

「こちらの損害は今回も0つすよ姐さん」

背の高い、少し軽そうな男が報告に来る。

「セディア、少し休め」

両腕の見事な鉄との融合。

美しさすら感じるセディアと呼ばれた男の腕。

成功例

そう呼ばれる、上質な鉄器兵達が、レイリの部下だ。

見た目だけでなく、彼らは融合がうまくいつているため、他の鉄器よりも行動力に長けている。
その上歴戦者たちだ。

鉄器の存在を手に入れたとはいえ、スレイドも強国。
そう簡単に落とせるものではない。

そのなかでも不落とされてきた陣のうちの一つを たったの一月で
陥落間近まで追い込んでいる。

「優秀だなセディア」

「姐さんこそ人間の頃から強かったっすよね」今じゃ腕相撲も勝て
ませんわ」

おどけるセディア。

「なんだと！」

レイリがセディアを蹴飛ばす。

洒落にならないつつこみにセディアが悶絶する。

266 部隊

レイリがコアシリーズになる以前 前線の戦いを続けていた仲間も
いる。

生え抜きの選抜隊。

266 部隊の戦果はレイアニアの優勢を加速させる。

第四章 スレイド併合 part・1

約20名

レイリの所属するゲリラの推定残数

急行で行われた髑髏の殲滅戦

圧倒的な兵数にこの現状。

「これは結構やばいな……」

陣を捨て北にだいぶん進んだ深い森の中

レイリはメイヘルを守りながら呟く

「そうだな。少しだけ休んでおこう」

たった一週間前

メイヘル宛に届いた小包

抱えられるほどのサイズ

その中身はアテリア少佐の生首

「さすがに死ぬかもな……」

追手を取りあえず全て殺しぼやく。

今味方は何人だ。

スレイドの軍人もレイアニアの服に身を包み襲ってくる。

「わが国は負けた」

メイヘルが天を仰ぐ。

「やめるか？」

「いや、私は早々にゲリラとなった身、国よりもおまえたちだ」
数少ない仲間たち。

レイアニア陣営は騒がしかった。

騒ぎの張本人はアリス。

「まだ…なの？」

自軍の兵を何人も血みどろにして

「アリスさん…少しおちつ　が…！」

なだめにいった一人も瞬に殺される。

「まだレイリを殺せないの！？殺しにいかせろおおおおお…！」
その咆哮は響き、皆を震わせる。

「ぜつ…ぜつ…」

また死んだ。

メイヘルは無事。

「レイリ、おまえまで私に付き合う必要も無い」
「うるせえ…」

レイリは思う。この理想のために自らを投げ打つ人間を守ってもいいと。

刀の下の幼い少女。

腹部から飛び出す鉄球。

「ハルド…お前の手持ちか…」

つい先ほどのコアシリーズの襲撃

これで三度目。

どれも餓鬼…

歴戦の兵達よりよほど苦戦させてくれる。

だいぶ馴れた。

はじめて餓鬼のコアシリーズを殺したときよりも 強くなった。
その自覚は正確だろう。

経験だけじゃない、戦闘の技術だけじゃない。
レイリは確実に強くなっている。

アリスの暴走

アリスをここまで運搬してきた隊は全滅した。

「はあ…はあ…」

アリスとは別にロリックの部隊が主導してレイリ達を追い詰めているらしい。

留めの戦い用に待機させられるのは限界だ。

あいつがいるから、セレス様は私に気がつかなかった。

どこだレイリは。

「おかしいな…」

数日間 ほぼ毎日続いた追撃が無い。

自分達を何故殺さない。

最早5名の生存者。

「あれか」

レイリが立ち上がる。

ここからわかる程の強い火の手。

夜の空に赤く反射している。

「レイリ…行くのか」

メイヘルはもう立ち上がる事すらできない。

「私が目的だろうしな…あんな事するやつは一人だ お前は関係ない」

レイリが剣を携える。

「レイリ…その前に最後のわがまを聞いてくれ」

先に逝く事を望んだ三人の死体を綺麗に並べる。

メイヘルとレイリの目が合う

「ありがとうレイリ。お前の剣で死ぬほうがよほどいい」

無理して立ち上がるメイヘル

「情けない、私とあろうものが、寄りかからないと立てないなんてな」

櫛の木に寄りかかり、できるだけ真っ直ぐに…

「レイリ お前と戦えたこと誇りに思うぞ」

レイリが綺麗に剣を振る。

静かに

「……………」

「レイリ…」

アリスの喜びの声

燃え盛る炎を背に立ち迎える。

「……………」

酷い悪臭。

死体を積み上げ燃やしている。

消えにくい火がオレンジ色に地面を照らす。

「ようやくだね！…！ようやく殺せる！…！」

アリスの剣が細長くしなる。

間合いはレイリの剣の約3倍。

「殺してみる」

レイリは地を強く蹴り込んだ

第四章 スライド併合 part・2

鞭のような剣

縦に向けられれば 視界から消える

炎に反射した蝶のような輝き

「ちっ…」

レイリの肩が裂け血が流れる。

「あは！いいでしょうこの剣！！どう？ どう？？」
アリスは上機嫌だ。

アリスの戦闘は無茶苦茶だ。

戦技もあったものでは無い 本能

ただその残虐な本能在確実にレイリを捉えていく。

「あはは！！あははは！！！」

速度

武器の重量差

誰かがアリスに この対レイリに的確な武器を与えたのだろう。

踏み込もうとすれば、数箇所裂ける。

煙草に火をつける。

何本目だろうか。

『死んでいい命などないの』

そんな言葉を思い出しながら、マリアは時間を過ごす。
己の感情はエゴ。

暴力めいた犠牲を必要とする理想。

セレスの理想は自分だけを犠牲にした。
ただそんなものは叶う事等無い。

ハルドの理想は全てを犠牲にした 己を含め。
だからこそ自分の理想すら飲み込む。

利害の一致

それが全てなのか。

「俺はハルドの目的等どうでもよい
ロリックの先日の発言。

マリアだけに聞かされた。

だけど、その内容の予測はハルドから以前に聞いている。

「レイリ・ミドラか…」

勝つのだろうな。単純にそう思う。
悪魔のような話だ。

この物語に一番意識を向けていないのはレイリだろう。
それもそうだ。
ただの一軍人の彼女。
だからこそ。

2

「え…」

アリスは初めて気がついた。
地べたに這い蹲るのは自分だと。

自分はレイリより強いはずなのだ。はずだった。
あの攻撃の速さから抜けれるほどじゃないはず。
何回切った？

見上げたレイリの傷は大したものじゃない。

「おい」

レイリの呼び声と共に顎に鈍痛が走る。
きがつけば仰向けだ。
空を炎が照らしている。

「なあ、アリス 私は強くなっただろう」

「あぎゃ！！！！」

骨のつぶれる音。

「おまえを倒すのに剣すらいらなんだからな。」

「があああ！！クソ！！クソ虫があああ！！」

惨め。

大腿が踏み折られた。

「なあ！！アリス！！クソ虫は強くなっただろう？？」

「ぎゃふ！！！」

のた打ち回る。

痛い 痛い。

「ひ…」

レイリの目

恐ろしく冷たい。

赤い炎を映しても ぶれないその視線。

「なあ？アリス どうせこの周囲を私ではどうにもできない数が囲んでるんだろ？なあ！！！」

蹴り上げ 踏む。

血反吐を吐き転がりまくるアリス。

長い髪は砂まみれに。

「はあ はあ はあ はあ はあ」

再生してくるのはコアシリーズの特性。

つながった脚で立ち上がろうとする。

それは最早逃げる為だ。

「どうせ二人とも死ぬんだ　ゆっくり余生を楽しもうじゃないか」

ゴツ！！！

「ふざい　いいいい！！！」

また脚。

「さてロリック。今回の戦いで一応おまえの筋書きは一区切りだ」
ロナ・ハルドは囁く。
「今後の未来はどうする？私を殺すか、それともさらなる力が必要か」

「言うとおりだ。もうすぐ貴様を生かす理由は皆無になる」
屈強な兵達。

ハルドを一瞬で殺せるように構えている。

「マリアはどこだ」

唯一の問題。

「後ろだ」

ロリックの首筋の冷たい感触。

「ロリック、セレス様のためだ　控えてくれ」

「くくく……」

ハルドの佇まいは変わることは無い。

深く余裕を持ち

楽しむように眺めている。

「いたしかたない状況とは本当にゆかいなものだ

ロリック今から交換条件を出そう。 以前のおまえのようにな」

「熱いか？」

喉が焼け 肌がただれ 髪も燃え尽きた

何回投げ込まれた。 あの火の中に。

「ぎゅあ…ゆるじ…ゆる じで…」

「はあ？何を話しているかわからないな」

「ぐぎゃああぐあぐげあああああああ」

突き飛ばされるようにまた火の中。

燃えつきかけた炭のような死骸に埋まるアリスの体。

「あぎゅ はひゅ ふは」

ズリズリと皮膚を引きずり這い出し来る姿をただ見下すレイリ。

「おまえでも生きようとするんだな 教えてくれアリス、何故人は
生きようとする？」

「ぶぎゅ ぎゅうつうつう！！！」

焼け爛れた傷口に砂をすり込むように踏みつけて脚を動かす。

だいぶ空は明るくなってきた。

「なあ アリス 死にたくはないか？ そうか まだか」

「ぎよ あおおおおおおおおお」

また火の中。

投げ込むとあがる火の粉と炭。

人の焼ける中に投げ込むと、一瞬その悪臭は濃くなる。

「這いずってでも生きたいか　その気持ちだけは何故かわかる」
また放り込む。

靴先に剥がれた皮膚が付着している。

レイアニア帝国の首都。

民衆は歓喜していた。

悪政の要、貴族の処刑。

並べられた幾人かの首が落ちると同時に花火が上がる。

戦勝、そして新しい時代の始まり。

ロリックの名を叫ぶ。

稀代の英雄は手を挙げそれに答える。

最後の首が落ちると、街はパレードで溢れる。

騎馬兵が大通りに入ると花が舞う。

歓迎された帰還。

戦争は終わったのだ。

第四章 スライド併合 part・3

今回の戦争に置いて、唯一処刑対象にならなかったレイアニア六貴族。

財を投げ打ち終結へと導いたシスティア家令嬢のセレスと、新王ロリックの婚姻の知らせは、戦勝の喜びを更に大きくした。

セレス・システィアの心労を原因に、その式は小規模に行われることとなった。

「レイリ・ミドラの死亡は確認された。焼けたコアが二つ回収されている」

机の上にはコアが二つ。

アリスとレイリのもの。

「ようやくね、セレス」

ハルドが呼ぶ。

呆けた笑顔で答えるセレス。

知性を感じさせなくなってしまった表情。

「ロナ・ハルド、これが終わればお前は死んでもらうぞ」

ロリックの直属兵がいつでも動けるよう構えている。

「くく…いいわ これが見たかったただけだもの」

同時刻 別室でロリックとマリアが二人で話す。

「コアは全てで57 ちょうど人の大きさになる。そんな事だとはな」

上等な煙草の煙。

あまりにも非常識な話だ。

コアの目的。

かつて古代の王になるために戦い、奪い合う。

全てを手に入れ体内をコアで満たし、神を作る。

ハルドは言った「三個程度でいいのよこの程度の時代なら」

セレス・システィア 戦闘的ではないあの少女の体内には、はじめから二つのコアを埋め込んでいた。

ロリックが覇権を手に入れ残った問題は、各地のどこにあるかわからないコアの回収。

セレスに足りない『奪う』という本能。

それを補うのは、コアを回収し続けたレイリ・ミドラの記憶。

「レイリは不憫だね。あれが一番誰でもよかった 生き残りさえすれば」

マリアも疲れをみせる。

「私とアリスの望みはかなう。コアの回収には従事させてもらうよ
それでいいなロリック」

コアシリーズの存在はそう世間に明らかになったものでもない。
できれば秘密裏に回収してしまいたいものだ。

ハルドの言う、セレスの完成さえすれば大分容易になるだろう。

マリアは思う。

セレス様が体内にアレを入れていなければ。

それは口に出すことの無い思い。
セレス自信が志願したらしい事。今までと同じ『戦争を終わらせる
事の役に立てるかもしれない』
そんなセレスの思い。

ロリックがハルドとセレスのいる部屋に入る。
まだ何も行われていない。

「くく…ロリック、見に来たの？私に不正がないか」
正直、ハルドが信頼できるわけではない。

今回の戦闘でコアシリーズについてはわかっている。
三つ程度のコアならば、隊をもつてすれば抑えられるであろう。
それ故の決断。

それにハルド、そしてセレスに何かあれば即座に首を落とそうと構
えているのは
ロリックの腹心にてコアシリーズの兵5名。

この交換条件を飲むにあたりハルドにそっさせた者達。

「はやくしろ」

「あら、焦ってるのかしら」
ハルドが煽る。

ハルドさえ死に、マザーコアを破壊さえすれば、これ以上生まれて
くることは無い。

マリアが遅れて部屋に入る。

「ロリック」

呼ばれて振り返る。

「おまえだけは化け物にならなかったみたいだな」

鉄狩り 終編

「レイリ・ミドラ…」

ロリックの眼前。

眼帯をはめた長い金髪の女が剣を抜く。

「くく…ははは…！」

ハルドが声を上げて笑う。

レイリがすかさず、ハルドの元に踏み込む。

圧倒的な速さ。

「おまえは斬れないんだっけな、完全なコアシリーズになると」

倒れたのはハルドではない。

後ろのロリックの兵。

一撃で確実にコアを抜かれている。

「一番お前を殺したいのにな」

そう言いながら投げた剣はセレスの後ろの兵に。

「コアシリーズはハルドを攻撃できないのを知っているかロリック？」

ハルドが言う。

「おまえは記憶というものを甘くみている、見てみる、今ではあの最弱だったレイリが最強だ」

マザーコアを持つものを攻撃できないという制約。

「セレスを！」

ロリックの掛け声に対し、残った三人の兵はすばやく動きセレスを囲む。

「何を焦っている」

レイリがロリックに近づく。

「ロリック…レイリにとってセレス等価値は無いわ… どうするの
マリア？」

マリアの剣はロリックの腰にあてられている。

「れ…レイリ…」

セレスが呼ぶ。

目の色に少しだけ光がはいる…」

「レイリ レイリ ごめんなさい ごめんなさい…」

微妙な膠着状態。

マリアがその中で口を開く。

「セレス様、責任の取り方をお教えます。あなたの力ならその三人を殺せます」

そしてもう一言。

「レイリ、ハルドを殺せ。手伝ってやる」

マリアの剣がレイリを貫く。
体から触手とともに飛び出る レイリのコア。

「ああ、これで斬れるな」

鮮血がレイリから噴出し彩る。

「くく… 実におもしろい発想だな」

鉄が床に落ちる音がした。

そして

倒れるように

レイリは剣で、ハルドを貫いた。

二年後・・・

「ああ、なんてこうなったかな」

隣国スレイドを併合し、一國統治を成し遂げたレイアニア帝国は、
わずかその一年後にその名を歴史より消す。
今の名は

【協和国セレス】

レイアニアの実質の最高指令権限上位者が戦勝日におきたクーデターにより死亡。

次点権力者が、国の代表を代理することになった事から今に至る。

『クーデター首謀者の数名の鉄器兵を単身制圧した』と発表された事実が、

代理王を正式な就任に導く大きな要因になる。

王権の名の下のレイアニアの国家としての解散。

引き続き政権を継続した新王のとった政策により成し遂げられた今の世の太平。

元スレイド、レイアニア関係なく人材を起用しての臨時統括班の設立、

その後レイアニアの領土となったスレイドを自治区として、民衆への領土返還

結果、各自治区にそれぞれ独立権を与えそこで選ばれた代表による国家運営への移行を完成させる。

たった数年でそこまでの功績を残したその人物を人は、和平の女神と呼ぶ。

「スレイド第四十二修繕地区について会議のお時間です」

従者からそう告げられると、その”和平の女神”はめんどくさそうに立ち上がった。

「はいはい。はぁ・・・」

だるそうにする和平の女神。髪を肩をすぎるくらいに伸ばしたマリアは、大あくびをする。

ふと、この高い位置にある自分の事務室の窓から街を見下ろした。

「マリア様 急いで下さい」

もう一人マリアを呼びに来た人物が急かす。

「ったく」

煙草を灰皿に押し付け頭を掻き立ち上がる。

部屋の外で待つのは金髪で右目に眼帯をした女性。

「今日もおまえの護衛か めんどくせえ」

「まあ 頼むわ。いろいろ狙われててな」

そう答えながら煙草に火をつける。

待っていた女性は勧められるも断る。

「また死ぬのだけは勘弁してくれよ」

長い廊下を二人は真っ直ぐに歩いていく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4926o/>

鉄狩り

2010年12月17日14時04分発行